

言語文化学科 言語応用コース

日英言語表現における
身体部位詞の意味拡張

学部 文学部

卒業年度 平成29年度

学籍番号 A14LA057

こうのかおり
河野花織

目次

序章	3
第 1 章 慣用表現の分析にあたって.....	5
1.1 先行研究紹介	5
1.2 用語の定義.....	6
1.2.1 対象とする言語表現について	6
1.2.2 メタファー・メトニミー・シネクドキーの定義	9
第 2 章 身体部位詞の意味拡張.....	12
2.1 「口」と「mouth」の比喩的拡張表現.....	12
2.1.1 「口」の比喩的拡張表現.....	12
2.1.2 「mouth」の比喩的拡張表現	19
2.2 「目」と「eye」の比喩的拡張表現	24
2.2.1 「目」の比喩的拡張表現.....	24
2.2.2 「eye」の比喩的拡張表現.....	33
2.3 「鼻」と「nose」の比喩的拡張表現	38
2.3.1 「鼻」の比喩的拡張表現.....	38
2.3.2 「nose」の比喩的拡張表現.....	43
第 3 章 人間の動作・状態に関する表現への拡張のまとめ	49
第 4 章 物体部分詞への拡張のまとめ	56
終章	59

比喻的擴張表現分類.....	60
英語慣用表現意味表.....	69
參考文獻	74
要約	79

序章

例えば、英語の **water** は、日本語の水とお湯の両方を意味するというように、日本語と英語で「同じ意味」であると言われている語であっても、その意味の適用範囲は異なることがある。私は、このような「語」と「意味」と「人間の認知」の関係に関心があり、語の意味拡張をテーマに選んだ。本論文では、言語を現実世界の反映としてではなく、人間がそれをいかに認知し解釈しているかを反映するものと捉える認知言語学の立場を取る。

分析対象を身体部位詞に選んだ理由は、具体的な形をもち、どの言語・文化下であっても同じ人間の器官として共通の働きをする身体部位から派生した意味は、言語間の比較がしやすいと考えたからである。今回選択した口・目・鼻の三部位は語の指示範囲も日英でほぼ共通している。つまり、日本語と英語の身体部位詞はほぼ「同じもの」を指すと考えてよい。ならば、身体部位詞がもつ「意味」も似ているはずである。巻下・瀬戸（1997）もメタファーに関する論考で「なぜ、意味の形成ないし生成のある部分が、人間の言語で共通している」のかという問いに対して、「私たちの身体を中心とした知覚・感覚様式が似通っているから」と述べている。これは、メタファーだけでなく、身体部位に関する比喩的表現全体に言えることであろう。しかし、実際には、同じ身体部位詞であっても、日本語と英語で意味の適用範囲は異なる。この差はな

ぜ生じるのかを、身体部位詞が含まれる慣用表現の意味のタイプと拡張のプロセスを分類・考察することで明らかにしたい。

第1章 慣用表現の分析にあたって

1.1 先行研究紹介

有菌（2013）は、Kövecses and Radden（1998）の action ICMⁱ、perceptual ICM を基に、「行為のフレーム」を設定し、〈道具〉としての身体部位詞で行為のフレームにおけるほかの要素を表すことができると述べている。これは、メトニミーによる意味拡張であり、論文ではメタファーとシネクドキーによる拡張も扱っている。

本論文では、この「行為のフレーム」と同じく、器官としての身体部位詞を中心とした意味のネットワークを構築し、その拡張の範囲を考察する。ただし、ネットワーク内の言語表現の概念・意味は独自に設定する。

身体部位の機能だけでなく形状の類似などに基づいて拡張が生じている表現の分析には松本（2000）の研究方法を参考にする。松本は「瓶の口」「取っ手」などの身体部位詞から物体部分詞への拡張を「位置」「形状」「機能」の類似に基づくメタファー（人体という起点領域から、物体という目標領域への写像）で説明している。

二言語間で身体部位詞の意味拡張の範囲を比較し、共通点と相違点を示している研究は複数あるが、その違いの要因にまで考察を進めている論文はほとんどない。本論文では、身体部位詞が含まれる慣用表現の意味のタイプと拡張のプロセスについて、日本語と英語の二言語間の比較

と三つの身体部位間の比較を行うことで、意味の適用範囲の差はなぜ生じるのかを考察する。対象とする慣用表現数が多いこと、人間の動作・状態に関する表現への拡張と物体部分詞への拡張の両方を扱っていることも本論文の特徴である。

1.2 用語の定義

1.2.1 対象とする言語表現について

本来の身体部位としての意味以外の意味で使用される身体部位詞に関心を持ち、研究対象にしたいと考えた。その代表が慣用表現であるため、まずは日本語と英語それぞれでの慣用句・idiom についての先行研究を概観する。なお本論文では、日本語の慣用句と英語の idiom 両方を同じ定義でまとめる。「慣用表現」という語を使用する際は慣用句と idiom の両方を指すものとする。

Nunberg, Sag and Wasow (1994) は、idiom の特徴として conventionality (慣用性)、inflexibility (定型)、figuration (比喩性)、proverbiality (諺性)、informality (非公式性)、affect (物事への評価・感情を表す) を挙げ、慣用性 (慣用句の意味を知らない時や文脈がないときに慣用句の意味が個々の構成語からは予測できない特性) 以外の特徴は絶対のものではないとしている。さらに、母語話者や文脈がある場

合に慣用句の意味を一旦知った上でその意味を個々の構成語に分解できるか否か、つまりその慣用的意味から個々の構成語の意味が導き出されるかどうか（石田（2015：92））という観点から idiom を合成的（compositional）なものと同合成的（non-compositional）なものに分けられると述べている。慣用句の研究には慣用性と非合成性を区別せずに、慣用句は「全体の意味は個々の構成語の意味の総和からは出て来ない」（国広（1985：7））また「全体の意味を要素に分解できない」（村木（1985：16））のものであるとする定義も存在する。しかし、本論文では慣用表現の構成語である身体部位詞はそれ自身が意味を持つものと考えるので、合成的な慣用表現も存在すると考える Nunberg et al.（1994）の立場を取る。

Nunberg et al.（1994）は、合成性の観点から idiom を二つに分類している。一つめは、「慣用的表現ⁱⁱ（idiomatic phrases）」で、句全体としての意味と個々の構成語の意味の間に規則的な対応関係が成立しておらず、句全体の意味は個々の構成語に分解できないもの、二つめは、「慣用的に結合した表現（idiomatically combining expressions）」又は「慣用的語結合（idiomatic combinations）」で句全体としての意味と個々の構成語の意味の間に対応関係が認められ、個々の語が句全体の意味のどの部分を担っているのかが分析できるものである。

また、中村（1985）では、慣用句を抽象化のレベルと比喩性とのかか

わりに応じて、「そのことばの文字どおりの意味を指示しながら、その指示の意味がそれにかかわる他の現実を受け手に指示するように働く力が強い」ものから「構成要素の結合以前に少なくとも名詞部分の転義が起こって」いるものまで順にグループ分けしている。前者の傾向は「慣用的表現」にみられ、後者の傾向は「慣用的語結合」にみられるものである。

以上二つの研究を参考に本論文では、慣用表現を以下の二つに分類する。字義通りの動作・状態が句全体として比喩的な意味を表し、句全体の意味は個々の構成語に分解できないものを「句全体比喩的表現」、構成語自体が比喩的な意味を持つ表現を「構成語比喩的表現」とする。

本論文で研究対象とする言語表現は、「慣用表現を含む比喩的拡張表現」である。ここでの慣用表現とは「二つ以上の語の結びつきが強く、その句全体が構成要素の基本義の単なる積み重ねとして直線的にたどりにくい意味を慣用的に獲得したもの」(中村 1985、田中 2002a 参考)であり、この中に句全体比喩的表現と構成語比喩的表現の両者が含まれる。慣用表現が慣用的意味を獲得するプロセスには比喩(メタファー・メトニミー・シネクドキー)が関わるので比喩的拡張表現の一種である。また、句としての慣用表現以外には、身体部位詞から比喩的に拡張された物体部分詞と、そこからさらに物体部分以外に抽象化された慣用化の進んだ表現を対象とする。

1.2.2 メタファー・メトニミー・シネクドキーの定義

本論文では、身体部位としての本来の意味から別の意味への拡張をメタファー・メトニミー・シネクドキーを用いて分析する。三つの比喻表現を以下のように定義する。

メタファー：二つの概念領域における事物同士の類似性、あるいは二つの概念領域間の類似性に基づき、その一方によって他方にアクセスする認知プロセス（有菌 2014：80）

メトニミー：同じ領域（ICM内）で、ある概念的実体（vehicle：媒体）が他の概念的実体（target：目標）に心的なアクセスを与えろという認知プロセス（Kövecses, Z., & Radden, G. (1998：39) 筆者訳）

シネクドキー：ある概念領域内の類似関係に基づき、概念領域においてより一般的な事物や概念によって、同一領域内のより特殊な概念にアクセスする、あるいは逆に、より特殊な事物や概念によってより一般的な事物や概念にアクセスする認知プロセス（有菌 2014：80）

メタファー・メトニミー共に起点領域・参照点ⁱⁱⁱに選ばれる事物は具体的なものである。特にメトニミーの参照点に選ばれやすいもの、つま

り認知的に際立つものについて、Kövecses, Z., & Radden, G. (1998) は、HUMAN OVER NON-HUMAN, CONCRETE OVER ABSTRACT, INTERACTIONAL OVER NON-INTERACTIONAL, FUNCTIONAL OVER NONFUNCTIONAL などの原則を挙げている。身体部位は、人間の一部であり、具体的存在で、周囲の事物に關与しながら機能するため、これらの原則を満たしている。そのため、身体部位詞は参照点に選ばれ、關連する事物に意味を拡張するのである。

メトニミーの意義展開パタンの分類については、瀬戸（2005,2007）を用いる。

表 1 メトニミーの意義展開パターン

空間	全体で部分、部分で全体、入れ物で中身、中身で入れ物、図地反転、空間隣接
時間	全体で部分、部分で全体、共起、原因でプロセス、プロセスで原因、プロセスで結果、結果でプロセス、原因で結果、結果で原因、行為者でプロセス、プロセスで行為者、道具でプロセス、プロセスで道具、素材でプロセス、プロセスで素材、場所でプロセス、プロセスで場所、対象でプロセス、プロセスで対象、行為者で結果、結果で行為者、道具で結果、結果で道具、素材で結果、結果で素材、場所で結果
特性	特性でもの、もので特性

-
- i ICM：理想化認知モデル。言語表現を支える社会制度や文化的習慣、時代背景に関する知識などの背景知識を理想化してことばの適切な使用と意味を捉えようとするモデル
 - ii 用語の日本語訳は石田（2015）より
 - iii ある対象を把握したり指示する際、その対象を直接把握するのに何らかの困難をともなう場合に、別のより把握しやすいものあるいはすでによくわかっているものを参照点として活用し、本来把握したい対象を捉えるというメトニミーの基盤となる認知能力を参照点能力と言う。

第2章 身体部位詞の意味拡張

「口」、「mouth」、「目」、「eye」、「鼻」、「nose」の比喩的拡張表現を派生義ごとに分類し、意味拡張のプロセスを考察する。

引用する慣用表現の意味は、参考文献の辞書・辞典から引用、または辞書・辞典を元に再構成したものである。辞書で採取した慣用表現をコーパスで検索し、使用例を確認して、各項目に分類した。

2.1 「口」と「mouth」の比喩的拡張表現

2.1.1 「口」の比喩的拡張表現

まず、「口」の身体部位としての指示範囲は、「鼻の下にあって、ものを食べ、声・ことばを出すところ。」(『三省堂国語辞典』(第七版))である。この「口」の意味を参照点や起点領域として以下のような意味拡張ネットワークを形成する。「口」はものを食べる機能と話す機能の二つをもつため、拡張の核は区別している。なお、㊦は構成語比喩的表現、㊧は句全体比喩的表現、㊨は物体部分詞を指す。

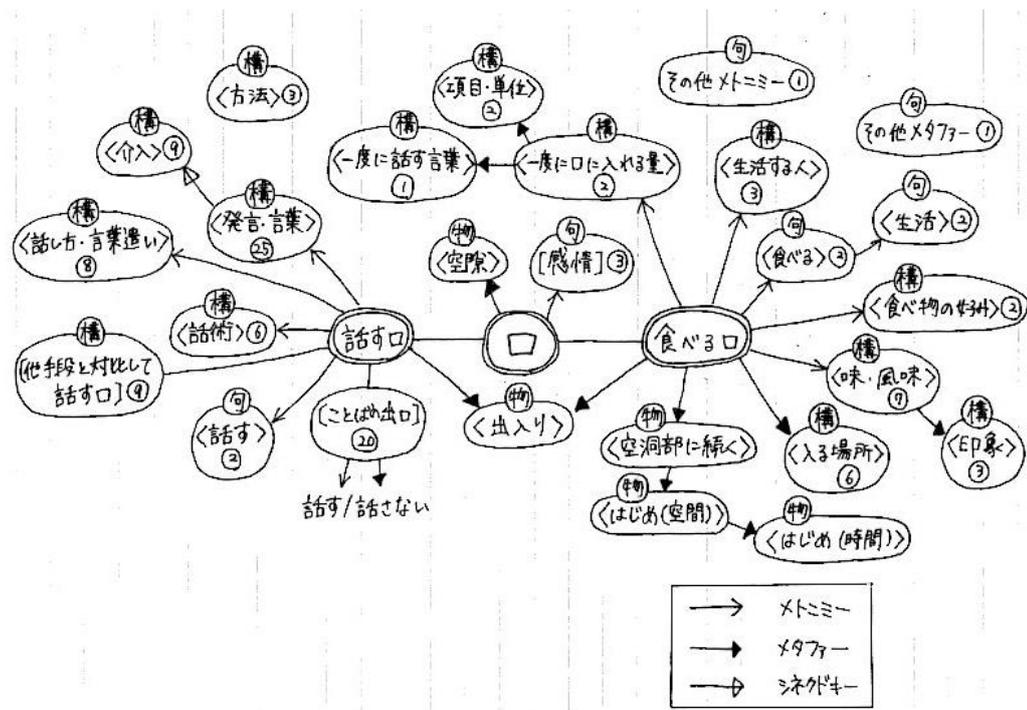


図1 「口」の意味拡張ネットワーク

○構成語比喩的表現

はじめに、発話器官としての口から派生した意味について考察する。

「口頭」、「口論」などの〔他手段と対比して、話す口〕は、書く・攻撃を加えるなどの他手段と対比して話すという口の機能をそのまま用いた表現である。「口がうまい」などの〈話術〉は、「口」という道具で「話す技術」というプロセスを表すメトニミーである。「口が悪い」などの〈話し方・言葉遣い〉も、同じく「口」という道具で「話し方」というプロセスを表すメトニミーである。「口が多い」などの〈発言・言葉〉は、「口」という道具で「話す」というプロセスを介し、「言葉」という結果を表す

メトニミーである。「口利き」などの〈介入〉は、介入する言葉は発言の一種であるため、シネクドキーである。〈発言・言葉〉の中でもさらに「口を揃える」のようにその内容を指したり、「口うるさい」では小言や「口が掛かる」では誘いを指したりと細分化はされるが、特に「介入」の意味をもつものは多くみられたため、項目を立てた。

次に、摂食器官としての口から派生した意味について考察する。

「甘口」、「口当たり」などの〈味・風味〉は、「口」という入れ物で中身である食べ物を表すメトニミーかつ、もので「味」という特性を表すメトニミーによる拡張である。口を入れ物とみなすのはメタファーであるが、この点については後述する。「甘口」、「辛口」、「口当たり」などは以下のように〈印象〉も意味する。

(1) 甘口ブラウスをインして、女のこらしく装ってもおしゃれ。(P
S (ピー・エス), 2002, 一般)

(2) ほかにも見どころ満載のプロ野球を辛口評論家・江本孟紀氏が
独自の視点で斬りまくる！（『メッタ斬り！プロ野球侍』,
2005,）

(3) ですから教団の歴史をきちんと検証しない限り、これからも権
力におもねって、口当たりがいいだけの人権論や平和論を唱え
るといったことも起こりかねないですね。（真宗大谷派宗務所

これらの表現は、あるものを食べた時に抱く印象を食べ物以外の領域にも写像するメタファーである。「口に合う」などの〈食べ物の好み〉は、食べる道具である「口」で食べた結果として抱く「食べ物に対する好み」を表すメトニミーである。「口を養う」などの〈生活する人〉は、「口」という食べる道具で「食べる」というプロセス、かつプロセスで行為者「食べる人」を表すメトニミーにさらに、「食べる」ことは「生活する」ことの一部であるという部分で全体を表すメトニミーが合わさっている。

「勤め口」などの〈入る場所〉は身体部位の「口」がもつ「ものを体内に入れる場所」という機能を他の領域に写像している。例えば、「売れ口」では品物が売れる先、「勤め口」では勤め先としてもものや人が入る場所という点が身体部位の「口」と類似している。「一口」などの〈一度に口に入れる量〉は、「口」という入れ物で中身である「口に入る量」を表すメトニミーである。「一口」は〈一度に話す言葉〉も表す。これは、〈一度に口に入れる量〉の認知プロセスを話す行為に写像したメタファーと言える。さらに、一区切りの量としての「口」は食べる・話す以外の領域にも写像され、〈項目・単位〉の意味ももつ。〈方法〉については、拡張のプロセスは不明だが、複数例表現が存在するので項目を立てた。

○句全体比喩的表現

はじめに、発話器官としての口を用いた表現について考察する。

〔ことばの出口〕という概念には、イメージスキーマの典型例である〈容器〉のスキーマが関わっている。イメージスキーマとは、「プロトタイプと拡張事例の共通点のみを抽出し、概略化して表した（辻 2013 : 188）」ものである。「具象的な意味の世界から抽象的概念への転移のかなりの部分は、この種のイメージスキーマの比喩的な拡張によって可能となる（山梨 2000 : 146）」とされ、〔ことばの出口〕の概念も「容器」のプロトタイプからメタファーによって拡張したものと説明できる。「容器」と「口」の共通点は、もの・音声が入り出る、開閉が可能、などがある。容器が開閉するイメージや容器からモノが出るイメージが〔ことばの出口〕にメタファー写像されている。

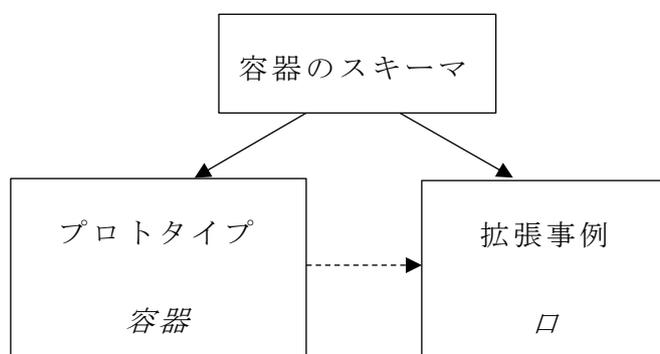


図2 容器のスキーマ

さらにこの〔ことばの出口〕という概念を前提としてメトニミーやメ

タフナーによる拡張が見られる。「口が開く」、「口から出る」などは部分で「話す」という全体を表すメトニミーである。「口が堅い」、「口が軽い」などは「容器のふたが堅いので開きづらい、中身が出ない」、「容器のふたが軽いので中身が出やすい」という様子を「言葉が口から出ない」、「言葉が口から出る」という様子に写像しているメタファーである。

「口を利く」などの〈話す〉は、「口を動かす」という部分で「話す」という全体を表すメトニミーである。

次に、摂食器官としての口を用いた表現について考察する。

「口をつける」などの〈食べる〉は、「口を食べ物につける」という部分で「食べる」という全体を表すメトニミーである。〈生活〉については、「口が干上がる」つまり「飲食物がなくなる」という部分で「生計が立てられなくなる」という全体を表すメトニミー、また、「口を糊する」つまり「粥を食べる」という部分で「やっと生計を立てる」という全体を表すメトニミーである。

「口」は感情を表す表現にも用いられる。ここでの「口」は、摂食器官としての意味も発話器官としての意味ももたず、口の見え方や様子で感情を表している。例えば、「開いた口が塞がらない」は「口が開いたままである」という結果で「驚き」という原因を表すメトニミーである。

○物体部分詞

「口」はその位置・形状・機能の類似性に基づくメタファーによって、物体部分や抽象概念を表す表現にも意味拡張する。身体部位「口」の特徴は、位置〈空洞部に続く〉、形状〈空隙〉、機能〈出入り〉^{iv}の三つである。

〈空洞部に続く〉は、身体のうち、「体の中へ食物を取り入れる場所」という口の位置を「ある空洞部へものを取り入れる場所」へと写像しているメタファーである。〈はじめ（空間）〉では、この特徴が抽象化している。空洞部が具体的な物体ではなく、物事のはじめの位置であるという部分だけを写像している。この概念には「口絵」、「糸口」などの表現が含まれる。「はじめ」という特徴が時間の領域に写像された表現が「宵の口」などの〈はじめ（時間）〉である。

〈空隙〉は、顔にある穴状の隙間という口の形状を「ある空間に存在する穴状の隙間」へと写像しているメタファーである。〈出入り〉は、「言葉を発する」、「食物を食べる」という口の機能を「ものの出入り」へと写像しているメタファーである。

「入口」、「火口」、「袋の口」のように〈空洞部に続く〉、〈空隙〉、〈出入り〉全ての類似性をもつ表現もある。なお、「入口」、「裏口」などは、「大人の入口」、「裏口入学」のように物理的な物体部分詞から抽象的な出入りの概念を指す表現にメタファー拡張している。

2.1.2 「mouth」の比喩的拡張表現

「mouth」の身体部位としての指示範囲は、「the opening in the face used for speaking, eating, etc.」（OALD（Eighth Edition））である。

この「mouth」の意味を参照点や起点領域として以下のような意味拡張ネットワークを形成する。「mouth」はものを食べる機能と話す機能の二つをもつため、拡張の核は区別している。

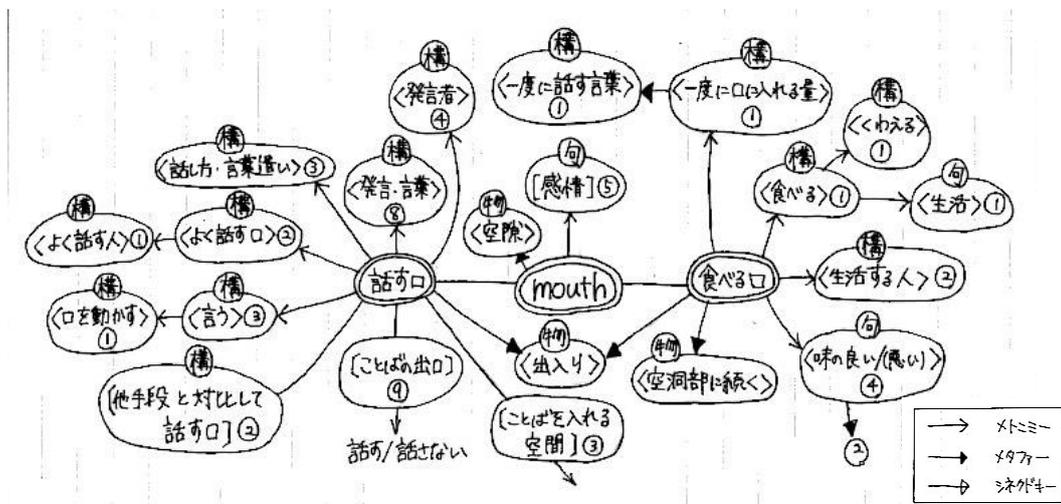


図3 「mouth」の意味拡張ネットワーク

○構成語比喩的表現

はじめに、発話器官としての「mouth」から派生した意味について考察する。

「by word of mouth（口頭で）」などの「他手段と対比して、話す口」は、書くなどの他手段と対比して話すという「mouth」の機能をそのま

ま用いた表現であり、日本語と同じである。動詞「**mouth**①②（①気取って言う ②ぶつぶつ言う）」はどちらも〈言う〉という行為を表す。これは、「**mouth**」という道具で「言う」というプロセスを表すメトニミーである。動詞「**mouth**」は、この〈言う〉という行為全体の内、「口を動かす」という部分を表すメトニミーによって「③声を出さずに口だけを動かして言う」という意味にも拡張する。「**a big mouth**（べらべらしゃべる）」などの〈よく話す口〉は、「**mouth**」というもので「おしゃべり」という特性を表すメトニミーである。「**a big mouth**」は、「おしゃべり」という特性で「よく話す人」というものを表すメトニミーにも拡張する。

「**have a foul mouth**（口が悪い）」などの〈話し方・言葉遣い〉は、日本語と同じく「**mouth**」という道具で「話し方」というプロセスを表すメトニミーである。「**be in a person's mouth**（人の噂になって、人に言われて）」などの〈発言・言葉〉も日本語と同じく、「**mouth**」という道具で「話す」というプロセスを介し、「言葉」という結果を表すメトニミーである。「**out of [from] a person's own mouth**（直接本人の口から）」などの〈発言者〉は、「**mouth**」という話す道具で「話す」というプロセスかつ、プロセスで行為者つまり「発言者」を表すメトニミーである。特に誰が話すかという点に焦点を置いている表現をここに分類した。

次に、摂食器官としての「**mouth**」から派生した意味について考察する。

動詞「mouth④（口に入れる、食べる）」の〈食べる〉は、「mouth」という道具で「食べる」というプロセスを表すメトニミーである。さらに、動詞「mouth⑤（くわえる）」は、「食べる」という行為全体のうち「しゃぶる、くわえる」という部分を表すメトニミーにも拡張する。「a mouth to feed（養われるべき人）」などの〈生活する人〉は、「mouth」という食べる道具で「食べる」というプロセス、かつプロセスで行為者「食べる人」を表すメトニミーにさらに、「食べる」ことは「生活する」ことの一部であるという部分で全体を表すメトニミーも合わさっている。これは、日本語と同じ拡張である。「mouthful①（一口分、ロ一杯）」の〈一度に口に入れる量〉は、「mouth」という入れ物で中身である「口に入る量」を表すメトニミーである。「mouthful②（長い言葉）」は〈一度に話す言葉〉も表す。これは、日本語と同じく、〈一度に口に入れる量〉の認知プロセスを話す行為に写像したメタファーと言える。

○句全体比喩的表現

はじめに、発話器官としての「mouth」を用いた表現について考察する。

英語でも日本語と同じく〔ことばの出口〕の概念が存在する。これを前提としてさらにメトニミーによる拡張が見られる。「open one's mouth（ものを言う）」、「keep one's mouth shut（黙っている）」などは部分

で「話す」、「話さない」という全体を表すメトニミーである。日本語と違ってメタファーによる拡張は見られない。「take the words out of a person's mouth (〈人が〉言おうとしていることを先に言う)」、「mouth-filling (〈文句などが〉長ったらしい)」などの〔(これから言う)言葉を入れる空間〕という概念も、同じく〈容器〉のスキーマに関わるが、開閉・出るという点に焦点を当てないものとして区別する。容器と中身の関係性が口と言葉の関係性に写像されているため、言葉を取り出す、一杯になるという表現が可能となる。これらは、部分で全体を表すメトニミー、入れ物で中身を表すメトニミーによる拡張である。前で〈一度に話す言葉〉に分類した「mouthful②」もここに分類することができるが、以下のように「一言」の区切りであること、「mouthful①」からの拡張と考えた方が自然であることからこちらには分類しない。

- (6) For many years, theorists had been calling such an entity a "gravitationally collapsed object," a real mouthful to pronounce over and over again in a lecture. (長年の間、理論家たちはそのような物を「重力の崩壊した物体」という講義中に何度も発音するには本当に長い言葉で呼んでいた。)

(2014 Vol. 122 Issue 4, p10-11. 2p. 1 Color Photograph, 1 Black and White Photograph. *Celestial Lockup*

次に、摂食器官としての「mouth」を用いた表現について考察する。

「live from hand to mouth（その日暮らしをする）」の〈生活〉は、「手にしたものを口へ運ぶ」という部分で「生活する」という全体を表すメトニミーである。「melt in *someone's* [the] mouth（とろけるようだ、とくにおいしい）」、「mouth-watering（よだれの出そうな、おいしそうな）」などの〈味の良い／（悪い）〉は、「口の中で溶ける」、「よだれが出る」などおいしいものを食べた時に起こる結果で原因となる「おいしい」という状態を表すメトニミーである。さらに、「leave a bad/nasty taste in the mouth（後味の悪い思いをさせる）」での、悪い味が口に残っている時の嫌な気分の他の状況への写像や、「make *someone's* mouth water^②（欲しくてたまらなくさせる）」での、よだれが出るほどほしい様子の食べ物以外への写像などメタファーによる拡張が加わる表現もある。

「mouth」は感情を表す表現にも用いられる。日本語と同じくここでの「mouth」は、摂食器官としての意味も発話器官としての意味ももたず、口の見え方や様子で感情を表している。例えば、「down in the mouth（しょげて）」は、「口元が下がっている」という結果で「がっかりしている」という原因を表すメトニミーである。

○物体部分詞

「mouth」はその位置・形状・機能の類似性に基づくメタファーによって、物体部分や抽象概念を表す表現にも意味拡張する。身体部位

「mouth」の特徴は、位置〈空洞部に続く〉、形状〈空隙〉、機能〈出入り〉の三つである。

各特徴への比喩拡張プロセスは日本語と同様のため省略する。〈空洞部に続く〉、〈空隙〉、〈出入り〉の全ての類似性をもつ表現が最も多く「the mouth of tunnel（トンネルの出入り口）」、「the mouth of bottle（瓶の口）」などがある。「mouthpiece（吹き口、送話口）」は、口との隣接関係のメトニミーによる拡張である。日本語と異なり、時間表現や抽象的な概念への拡張は見られない。

2.2 「目」と「eye」の比喩的拡張表現

2.2.1 「目」の比喩的拡張表現

まず、「目」の身体部位としての指示範囲は、「顔の中で、ものを見るはたらきを受け持つ部分。人間では、額の下で鼻の左右に一つずつある。」

（『三省堂国語辞典』（第七版））である。この「目」の意味を参照点や起点領域として以下のような意味拡張ネットワークを形成する。

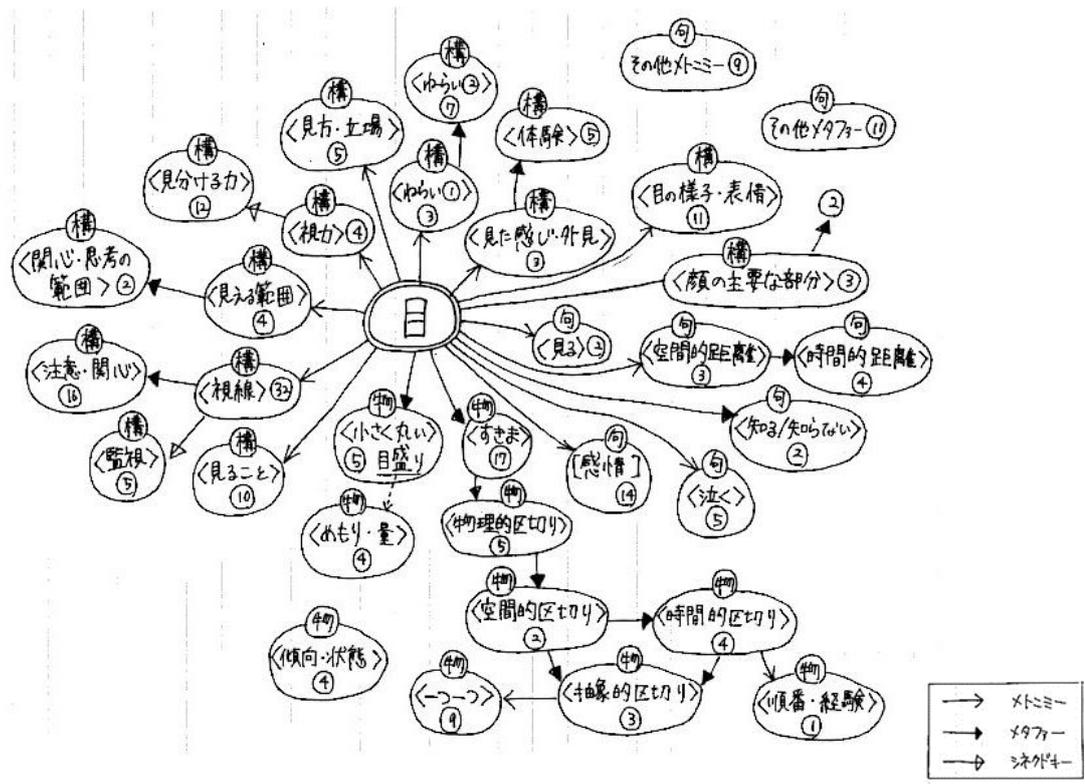


図4 「目」の意味拡張ネットワーク

○構成語比喩的表現

はじめに、視覚器官としての「目」から派生した意味について考察する。

「一目瞭然」、「目測」などの〈見ること〉は、「目」という道具で「見る」というプロセスを表すメトニミーである。「人目を引く」、「目を移す」などの〈視線〉は、「目」という道具で「視線」という見た結果を表すメトニミーである。「目を盗む」などの〈監視〉は、監視する視線は視線の一種であるため、シネクドキーである。「注目」、「目を配る」などの〈注意・関心〉は、対象が抽象物であるなど、実際に見てい

るわけではない。関心をもって何かを見ている様子を、関心をもっている様子に写像しているメタファーである。〈視線〉は実際に見ているもの、〈監視〉はその中でも見張っているという意味の強いもの、〈注意・関心〉は実際には見ていないものを分類しているが、複数の意味に分類される表現もある。

(7a) 僕はガラス戸を通して庭に目を向けた。(東野圭吾著 『私が彼を殺した』, 1999, 913)

(7b) まず中東に目を向けてみよう。(加藤朗著 『テロ』, 2002, 316)

(8a) 飼い主さんは目が離せませんね。(愛犬の友, 2001, レジャー／趣味)

(8b) でも、その美しさに目が離せない。(柳沢小実著 『12ヶ月のスクラップブック』, 2005, 590)

(7a) では、実際に庭を見ているので、この「目」は〈視線〉を表す。一方(7b)では、実際に中東の方向を見ているわけではなく、中東に注意・関心を向けるという意味なので、この「目」は〈注意・関心〉を表す。(8a)では、飼い主は実際にペットを見張っている所以、この「目」は〈監視〉を表す。一方(8b)では、実際にそちらを見て

いるので視線の意味ももつが、ここでは心が惹きつけられていることが最も強調されるので、この「目」は〈注意・関心〉を表すと考える。

「目に入る」などの〈見える範囲〉は、「目」という道具で「見る」というプロセス、かつプロセスで見る対象である「見える範囲」を表すメトニミーである。この、見える範囲にあり見ているという状況を関心の範囲内にあるという状況に写像しているメタファーが〈関心・思考の範囲〉である。「目がいい」などの〈視力〉は、「目」というもので「見る力」というその特性を表すメトニミーである。「目が高い」、「目利き」などの〈見分ける力〉では、実際に対象を見ているので「目」は「見る力」を表しているが、その一種である物事の本質や価値を見分ける力を表すため、シネクドキーである。「素人目」などの〈見方・立場〉は「目」という道具である「立場・見方」で見ているというプロセスを表すメトニミーである。「目掛ける」、「目標」などの〈ねらい①〉は、「目」という道具での的などの具体的対象を「見てねらう」というプロセスを表すメトニミーである。「目指す」、「目的」などの〈ねらい②〉は、〈ねらい①〉の「見てねらう」という過程を実際に見ているわけではなく「ねらう」という過程に写像しているメタファーである。「目指す」と「目標」は両方の意味をもつ。

(9a) トスや送球の高さは、ベースに向かって走る投手の顔の高さぐらいを目標にする。(土屋弘光著 『New 野球テクニク』, 1989,)

(9b) そのときは、少し難度の高い目標にしてみる。(河原成美著 『一風堂五輪書』, 2004, 159)

(9a) は、実際に投手の顔の高さを見ているので〈ねらい①〉の意味を表し、(9b) の「目標」は、目に見えるものではないため〈ねらい②〉の意味を表す。「見た目」などの〈見た感じ・外見〉は、「目」という道具で見る対象を表すメトニミーである。「痛い目」などの〈体験〉は、「痛い目を見る」という言い方があることから、見る対象を表すと言えるが、実際にはある対象を見ているわけではないため、メタファーである。「流し目」、「目が笑う」などの〈目の様子・表情〉は、「目」というもので「目の表情」というその特性を表すメトニミーである。

視覚器官としてではなく、「目」が顔の中で重要また顔立ちの決め手となる部分として扱われている表現もある。「目鼻立ち」などの〈顔の主要な部分〉がそれに当たる。さらに「目鼻がつく」などは、「主要な部分」という特徴だけが顔以外の物事に写像されたメタファーである。

○句全体比喩的表現

《句全体メトニミー表現》

はじめに、視覚器官としての目を用いた表現について考察する。

「目にする」などの〈見る〉は、「目の近くにある」という原因で「見る」というプロセスを表すメトニミーである。「目先」、「目前」などの〈空間的距離〉は、目の前の空間でその人から見える空間を表す空間隣接のメトニミーである。

次に、目の様子に注目した表現について考察する。

「目が潤む」、「目頭を押さえる」などの〈泣く〉は泣くときにする動作の部分で「泣く」という行為全体を表すメトニミーである。「目」を用いた句全体比喩的表現には、感情を表すものが多くある。「怒り」、「興奮」、「驚き」、「悲惨」、「喜び」を表す表現があり、「目」はプラス・マイナスどちらの感情を表すにも用いられることがあるのが特徴である。いずれも、目を大きく見開いたり、輝いたりするプロセスで、その原因となる感情を表すメトニミーである。

他には、「冷たい目、横眼で見る」というプロセスで「非難」という原因を表すメトニミーである「白い目で見ると」や「目が黒い」という部分で「生きている」という全体を表すメトニミーである「目の黒いうち」などの表現がある。

《句全体メタファー表現》

視覚器官としての目を用いた表現について考察する。

「目を開く」、「目をつぶる」の〈知る／知らない〉は、目を開いて／つぶって、物事を見る／見ない状況を、物事を知る／知らない状況に写像しているメタファーである。Lakoff and Johnson も概念メタファーの一つとして、UNDERSTANDING IS SEEING（理解することは見ることであり）^vを挙げている。

句全体メトニミー表現で挙げた「目先」、「目前」などの空間的距離を表す表現は、時間的に先にあることを表す表現に拡張する。根木（2015）によると、ある点から他点への空間的移動の認知は時間の経過に結び付けられおり、空間的距離と時間の経過は対応している。そのため、空間的に近いことを表す「目先」、「目前」、「目下」は〈時間的距離〉という意味ももつ。「長い目」は空間的距離は表さないが、同様のプロセスで時間的距離を表す。

他には、「起きて意識がはっきりする状態」を「迷いを脱して理性を取り戻す状態」に写像しているメタファーである「目が覚める」や「光がない状態」を「希望がない状態」に写像しているメタファーである「目の前が真っ暗になる」などの表現がある。

○物体部分詞

「目」はその形状の類似性に基づくメタファーによって、物体部分や抽象概念を表す表現にも意味拡張する。位置・機能の類似性に基づく拡張はない。拡張の元となる身体部位「目」の特徴は、形状〈小さく丸い〉〈すきま〉の二つであり、ここからメトニミーやメタファーにより意味が拡張している。

「縫い目」、「目盛り」などの〈小さく丸い〉は、目の小さくて丸という形状の特徴を他のものに写像しているメタファーである。このうち、「目盛り」の「目」から、「八分目」、「目一杯」などの〈めもり・量〉を表す表現にも派生している。

「網の目」、「切れ目」などの〈すきま〉は、目の輪郭の顔の中で開いているすきまとしての特徴を他のものに写像しているメタファーである。この〈すきま〉の区切るという点だけを写像したメタファーが、物理的・空間的・時間的・抽象的の四つの「区切り」である。〈物理的区切り〉には、「折り目」、「分け目」などのあるものを区切る物理的な線や点を指す表現を分類している。〈空間的区切り〉には、「境目」、「分かれ目」というあるものを区切る空間全体を指す表現を分類している。〈時間的区切り〉には、「変わり目」、「切れ目」などの時間の流れの区切りを指す表現を分類している。〈抽象的区切り〉には、「境目」、「分かれ目」などの空間的でも時間的でもない物事が区切れるところを指す表現を分類してい

る。例えば、「境目」は以下のように二つの意味を持つ。

(10a) この扇状地のはて、国中平野に入るちょうどその境目を J R
桜井線が走っている。(中井久夫著 『時のしずく』, 2005,
049)

(10b) あのとときの北京では、私にもまた、そういう生死の境目のよ
うなときがあったのです。(荒巻義雄ほか著 『紺碧要塞の
国際論』, 1994, 304)

(10a) は〈空間的区切り〉、(10b) は〈抽象的区切り〉の意味である。

さらに、十年目、三度目などの「数詞+目」の〈順番・経験〉は、
〈時間的区切り〉の図地反転のメトニミーである。「科目」、「目次」な
どの〈一つ一つ〉は、区切る線とは反対に中身の物事一つ一つを指す
〈抽象的区切り〉の図地反転のメトニミーである。また、今回拡張の過
程を説明することはできなかったが「落ち目」、「効き目」などの〈傾
向・状態〉の意味も持つ。

2.2.2 「eye」の比喩的拡張表現

「eye」の身体部位としての指示範囲は、「either of the two organs on the face that you can see with」(OALD (Eighth Edition)) である。

この「eye」の意味を参照点や起点領域として以下のような意味拡張ネットワークを形成する。

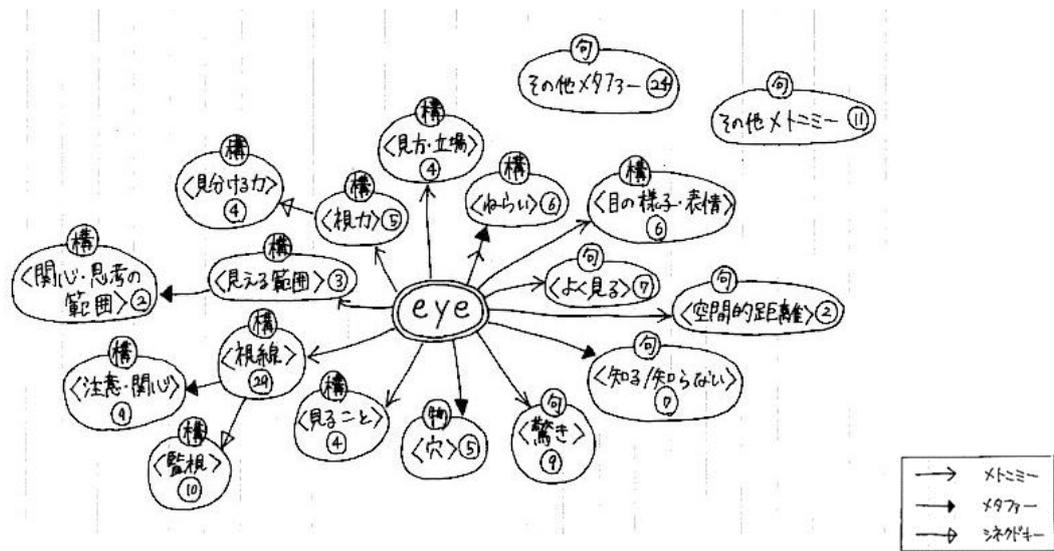


図5 「eye」の意味拡張ネットワーク

○構成語比喩的表現

はじめに、視覚器官としての「eye」から派生した意味について考察する。

「by the [one's] eye (目分量で、目測で)」などの〈見ること〉は、「目」という道具で「見る」というプロセスを表すメトニミーである。

「in the public eye (世間の目に触れて)」、「drop one's eyes (視線を落とす、うつむく)」などの〈視線〉は、「目」という道具で「視線」とい

う見た結果を表すメトニミーである。「keep an [one's] eye on①（～を見張っている）」などの〈監視〉は、監視する視線は視線の一種であるため、シネクドキーである。なお、「private eye（私立探偵）」は、さらに監視する目という部分で人全体を表すメトニミーが加わっている。

「have eyes only for（～から目を離せない）」などの〈注意・関心〉は、対象が抽象物であるなど、実際に見ているわけではない。関心をもって何かを見ている様子を、関心をもっている様子に写像しているメタファーである。日本語と同じく〈視線〉は実際に見ているもの、〈監視〉はその中でも見張っているという意味の強いもの、〈注意・関心〉は実際には見ていないものを分類している。ただし、日本語よりも区別が難しく、〈監視〉に対象が抽象物のものや〈注意・関心〉に実際に対象を見ていると取れる例が混ざっている場合もある。

- (11a) All eyes were on the catwalk and no one appeared to notice her, apart from a tall, grey-haired woman in the uniform of an atelier who moved towards her accusingly. (みんなが張り出し舞台に注目しており、アトリエの制服を着て非難するように彼女の方に移動した背の高い灰色の髪の女性以外は誰も彼女に気がついていないようだった。) (Fiction (Prose) BNC-BMW)

(11b) All eyes are on Sloane Street this month with two new shop openings to make the already fashionable street even more so. (すでにおしゃれな通りをさらにそうするために今月新たな二店舗が開店するスローン通りにみんなが注目している。) (Articles & Reports (Humanities & Social Science) BNC-G2E)

(11a) では、実際に周囲にいた人々が catwalk (ファッションショーの張り出し舞台) を見ているので「eye」は〈視線〉を表す。一方

(11b) では、実際に人々が Sloane Street を見ているわけではなく、関心が集まっていることを意味するので「eye」は〈注意・関心〉を表す。「meet *someone's* eye(s)② (～の目に入る、目に見える)」などの

〈見える範囲〉は、「eye」という道具で「見る」というプロセス、かつプロセスで見る対象である「見える範囲」を表すメトニミーである。

この、見える範囲にあり見ているという状況を関心の範囲内にあるという状況に写像しているメタファーが〈関心・思考の範囲〉である。これ

らの過程は日本語と同様である。「have strong eyes (視力がいい)」

などの〈視力〉は、「eye」というもので「見る力」というその特性を表すメトニミーである。「have an eye for (～を見る目がある)」など

の〈見分ける力〉では、実際に対象を見ているので「目」は「見る力」

を表しているが、その一種である物事の本質や価値を見分ける力を表すため、シネクドキーである。これらの過程も日本語と同様である。「in the eye of (～の見地に立って)」などの〈見方・立場〉は「eye」という道具である「立場・見方」で見ているというプロセスを表すメトニミーである。「eye」の慣用表現には、日本語の〈ねらい①〉に当たるものは存在しないが、その過程を抽象的対象に写像しているメタファーである〈ねらい〉は、日本語と同様に存在する。「have an eye to① (…に目をつけている、…を目指す)」などがこれに当たる。「make eyes at someone (～に色目を使う)」などの〈目の様子・表情〉は、「eye」というもので「目の表情」というその特性を表すメトニミーである。

○句全体比喩的表現

《句全体メトニミー表現》

はじめに、視覚器官としての「eye」を用いた表現について考察する。

「have an eye out (見逃さないように注意する)」などの〈よく見る〉は、「目を見開く」という部分で「よく見る」という全体を表すメトニミーである。「before one's eyes (目の前で)」などの〈空間的距離〉は、目の前の空間でその人から見える空間を表す空間隣接のメトニミーである。日本語では〈空間的距離〉は、メタファーによって時間的に先にあ

ることを表す表現に拡張し〈時間的距離〉を表すが、英語ではそのような拡張はみられない。

次に、目の様子に注目した表現について考察する。

「*One's eye pop out.* ((驚いて) 目玉が飛び出す) 」などの〈驚き〉は、「目玉が飛び出す」というプロセスでその原因となる感情である「驚き」を表すメトニミーである。

他には、「思いついた時に目が光る」という部分で「思いつく」という全体を表す「*a gleam in one's eye* (まだ全く漠然とした考え)」や、「目を動かさない」というプロセスで「動じていない」という原因を表す「*without batting an eye* (顔色ひとつ変えずに)」などの表現がある。

《句全体メタファー表現》

視覚器官としての「eye」を用いた表現について考察する。

「*with one's eyes closed*② (事情を知らずに)」などの〈知る／知らない〉は、日本語と同じく、目を開いて／つぶって、物事を見る／見ない状況を、物事を知る／知らない状況に写像しているメタファーである。

他に、「*get a black eye*② (評判が悪い、評判が地に落ちている)」は、「物理的にダメージを受けてあざができる様子」を「非物理的にダメージを受けて評判が下がる様子」に写像したメタファーである。「hit

someone (right) between the eyes (① (考えなどが) ひらめく②～に強烈な印象を与える)」は、目の間に何かがあった時の衝撃をひらめきと驚きに写像したメタファーである。

○物体部分詞

「eye」はその形状の類似性に基づくメタファーによって、物体部分を表す表現に意味拡張する。日本語と同じく位置・機能の類似性に基づく拡張はない。拡張の元となる身体部位「eye」の特徴は、形状〈穴〉のみである。「eyes of potatoes (芽)」、「the eye of the needle (針の穴)」などの表現がある。

2.3 「鼻」と「nose」の比喩的拡張表現

2.3.1 「鼻」の比喩的拡張表現

まず、「鼻」の身体部位としての指示範囲は、「顔の中央に突き出た部分。穴が二つあり、呼吸をし、また、においのかぐはたらきをする。」(『三省堂国語辞典』(第七版))である。この「鼻」の意味を参照点や起点領域として以下のような意味拡張ネットワークを形成する。

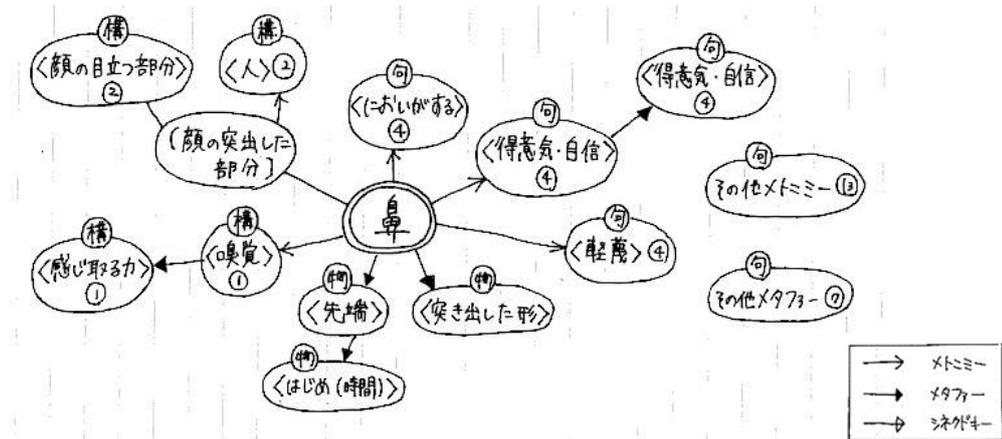


図 6 「鼻」の意味拡張ネットワーク

○構成語比喩的表現

はじめに、嗅覚器官としての「鼻」から派生した意味について考察する。

「鼻が利く」の〈嗅覚〉は、「鼻」というもので「嗅覚」というその特性を表すメトニミーである。「鼻が利く」には、(12b)のようなにおいを嗅いで物事を判断する様子をにおい以外のものを感じて判断する力へと写像しているメタファーによって生じた〈感じ取る力〉という意味もある。

(12a) しかし残念ながら、その香りも味もわたしにはわからなかった。
涙で鼻がすっかりきかなくなってしまったからである。

(三浦綾子著 『塩狩峠;道ありき』, 2001, 913)

(12b) 逆に言うと、篠遠先生には、こういうところにありそうだと
いう、長年の経験から鼻がきくようなことがあったんでしょ
うか。(篠遠喜彦, 荒俣宏著 『楽園考古学』, 2000, 275)

嗅覚器官としてではなく、「鼻」が「顔の突出した部分」として扱わ
れている表現もある。「鼻筋が通る」などでは「鼻」は〈顔の目立つ部
分〉としての面に焦点が当てられている。「鼻を突き合わせる」のよう
に「鼻」という顔の一部分で人全体を表すメトニミーによる拡張もある。

○句全体比喩的表現

《句全体メトニミー表現》

はじめに、嗅覚器官としての鼻を用いた表現について考察する。

「鼻が曲がる」は、「鼻の形が歪む」という結果で「悪臭がする」と
いう原因を表すメトニミーである。「鼻に付く」は、「においの分子が
鼻に付く」という原因で「嫌なにおいが離れない」という結果を表すメ
トニミーである。「鼻を打つ／突く」は、部分で「強においがする」
という全体を表すメトニミーである。これらの表現は、過程は異なるが
〈においがする〉という意味にまとめられる。なお「鼻に付く」は、「嫌
な臭いが鼻から離れない」ことを「人の振る舞いに飽き飽きする」様子
に写像した意味ももつ。

次に、鼻の様子や動きに注目した表現について考察する。

「鼻が高い」などの〈得意気・自信〉は、プロセスで「得意になっている」という原因を表すメトニミーである。人は得意な気分になった時には顔が上向き、鼻が高い位置にくることからこのような表現が生まれたと考えられる。また、「鼻」自体が自信や得意気な様子を象徴する部分として捉えられ、「鼻に掛ける」、「鼻を折る」のようなメタファーによる表現が生じている。例えば、「鼻を折る」では、自信の象徴である鼻を折る様子を相手の自信を挫く様子に写像している。「鼻であしらう」、「鼻で笑う」などの〈軽蔑〉は、「口で言葉を発することなく、鼻からの音だけで対応する」や「口で笑うことなく、鼻で笑う」というプロセスで「軽蔑」という原因を表すメトニミーである。

他には、「鼻を膨らます」という結果で「不満である」という原因を表すメトニミーである「小鼻を膨らます」や、「鼻息が荒い」という結果で「強い意気込みを持っている」という原因を表すメトニミーである「鼻息が荒い」などの表現がある。

《句全体メタファー表現》

句全体でメタファーとなっている表現には複数の表現で共通した意味を抽出できるものはない。例えば、「嫌な臭いに鼻をつまんで避ける様子」を「人を嫌って避ける様子」に写像した「鼻つまみ者」などの表現がある。

○物体部分詞

「鼻」はその位置・形状の類似性に基づくメタファーによって、物体部分や抽象概念を表す表現にも意味拡張する。身体部位「鼻」の特徴は、位置〈先端〉、形状〈突き出した形〉の二つである。

「鼻緒」は、〈先端〉の類似性のみに基づくメタファーである。「出鼻」、「鼻先」などは、〈先端〉と〈突き出した形〉の類似性をもつ表現である。「鼻先」はさらに空間隣接のメトニミーにより、鼻の前の空間も表す。この〈先端〉という位置が時間領域に写像されたメタファーである〈はじめ（時間）〉という意味もある。「出鼻を挫く」などが分類される。

(13a) 車はうしろに下がり、鼻先をやってきた道のほうに向ける。

(村上春樹著 『海辺のカフカ』, 2005, 913)

(13b) 鼻先にいる男が怒鳴っている。(ロバート・シーゲル著;中村

融訳 『氷海のクジラ』, 2000, 933)

(13a) の「鼻先」は、乗り物の先端を指している。顔全体の中で一番前に出て尖っている鼻と乗り物の進行方向に向かって一番前に出て尖っている部分への写像である。(13b) の「鼻先」は、鼻の前の空間を表す用

法である。

2.3.2 「nose」の比喩的拡張表現

「nose」の身体部位としての指示範囲は、「the part of the face that sticks out above the mouth, used for breathing and smelling things」

(OALD (Eighth Edition)) である。この「nose」の意味を参照点や起点領域として以下のような意味拡張ネットワークを形成する。

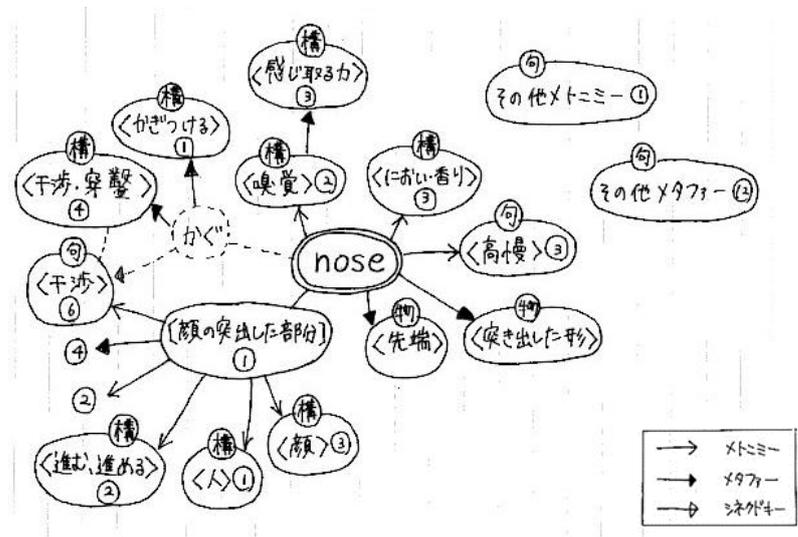


図7 「nose」の意味拡張ネットワーク

○構成語比喩的表現

はじめに、嗅覚器官としての「nose」から派生した意味について考察する。

「nose」が嗅ぐという意味をもつ表現はないがvi、においを嗅ぐとい

う機能から拡張した表現はある。「nose out (かぎつける、探し出す)」の〈かぎつける、探し出す〉は、においを嗅いであるものを探し出す様子を物事をかぎつける様子に写像しているメタファーである。「nose about (穿鑿^{せんさく}する、干渉する)」などの〈干渉・穿鑿〉は、においを嗅いで探る様子を物事に干渉する様子に写像しているメタファーである。

「have a good nose (鼻がいい)」の〈嗅覚〉は、もので「においを嗅ぐ力」という特性を表すメトニミーである。日本語と同じく、においを嗅いで物事を判断する様子をにおい以外のものを感じて判断する力へと写像しているメタファーによって生じた〈感じ取る力〉という意味もある。「follow one's nose② (直感に従う)」、「have a (good) nose for (～をかぎつけるのがうまい)」などが分類される。「the nose of a wine (ワインの香り)」などの〈匂い・香り〉は、「鼻」という道具で嗅ぐ対象である「におい」を表すメトニミーである。これらは、人間の動作・状態ではなく、物の特性を言う表現だが、鼻の形状・位置に基づいたメタファーではないため、物体部分詞としてではなく、こちらに分類する。

次に、鼻の形や動きに注目した表現について考察する。

「under someone's nose① (人のすぐ目の前で)」では、鼻は「顔の突出した部分」として扱われている。鼻は人間の顔の中で最も突出しているという特徴から、「show one's nose (顔を出す)」のような部分で顔全体を表すメトニミーや、「count noses (頭数を数える)」という部分で人全体

を表すメトニミーの表現に拡張している。さらに、人がある方向に進む時に鼻はその方向を向くことから、「nose into(ゆっくり進める)」、「nose one's way(ゆっくり前進する)」の〈進む、進める〉という意味が派生している。これらの表現は乗り物に対してしか使用されない。「鼻」という先端になる道具で「進む」というプロセスを表すメトニミーである。「ゆっくりと進む」という点には、においを嗅いで探りながら進む様子の写像も関わっていると考えられる。

○句全体比喩的表現

《句全体メトニミー表現》

嗅覚器官としての「nose」から派生した意味はなく、鼻の動きや形に焦点を当てた表現のみである。

「hold one's nose in the air(高慢な態度をとる)」などの〈高慢〉は、「鼻を空に向かって突き出す」というプロセスで「高慢」という原因を表すメトニミーである。構成語比喩的表現と同じく、「nose」が〔顔の突出した部分〕として扱われている表現もある。例えば、鼻は前進する方向に前に突き出ているので「follow one's nose^①(真っ直ぐに進む)」という表現が生まれたと考えられる。

《句全体メタファー表現》

こちらにも鼻の動きや形に焦点を当てた表現が多い。

〔顔の突出した部分〕としての「nose」が用いられた表現には、「see farther than the end of *one's* nose（洞察力がある）」がある。これは、「鼻を越えて先を見る」という行為を「抽象的に物事の先を見る」行為に写像したメタファーである。「poke *one's* nose into（～に首を突っ込む）」などの〈干渉〉は、「物理的に鼻（顔）を突っ込んで関わっていく様子」を「物事に干渉する様子」に写像したメタファーである。

- (14) He loves poking his nose into all sorts of things throughout Europe, whether relevant to his office or not."（彼は自分のオフィスに関係あろうとなかろうとヨーロッパ中のあらゆる種類の問題に首を突っ込むことが大好きだ。）

(Fiction (Prose) BNC-B20)

先述した構成語比喩的表現の〈干渉・穿鑿〉と同様、においを嗅ぐという機能とも関連があると考えられる。

他には、「臭いを防ごうとする様子」を「不快なもの全般を防ごうとする様子」に写像した「hold *one's* nose（不快なことを無視しようと努める）」や、「鼻を折られて負ける様子」を「競争に負ける様子」に写像し

た「get a bloody nose ((競争に負けて) 鼻をへし折られる)」などの表現がある。

(15) Microsoft Corp got a bloody nose when it went head-to-head with Novell Inc and challenged NetWare with LAN Manager… (マイクロソフト社は、ノベル社と互角の勝負をして、「ネットウェア」に LAN マネージャーで挑戦した時に競争に負けて鼻をへし折られた。)

(Articles & Reports (Science & Engineering) BNC-CSD)

実際に人の鼻が折られているわけではなく、人間以外のものに対しても使用されているのでメタファーである。

○物体部分詞

「nose」はその位置・形状の類似性に基づくメタファーによって、物体部分を表す表現にも意味拡張する。身体部位「nose」の特徴は、位置〈先端〉、形状〈突き出した形〉の二つで、日本語と同様である。「the nose of 乗り物」、「the nose of the saddle」など、〈先端〉と〈突き出した形〉の二つの類似性をもつ表現にのみ拡張し、日本語のように空間や時間を表す表現には拡張しない。

iv 〈空洞部に続く〉、〈空隙〉、〈出入り〉の特徴は、松本（2000）より

v Lakoff, G., & Johnson, M. 1986『レトリックと人生』渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳 大修館書店

vi **nose around, nose at** などで「嗅ぐ」という意味だが、主語が動物であることがほとんどである。

第3章 人間の動作・状態に関する表現への拡張のまとめ

本章では、身体部位詞の人間の動作・状態に関する表現への拡張について考察する。まず、各身体部位詞の構成語比喩的表現と句全体比喩的表現の意味を「能動」と「受動」という観点から分類する。ここでの「能動」は自分の意思で操作できるもの、「受動」は自分の意思で操作できないものという意味である。二重下線は日本語と英語で共通しない意味に引いている。

表2 能動的表現と受動的表現

	能動的表現	受動的表現	他
口 構成語比喩的表現	〔話す口〕 <u>〈話術〉</u> 〈話し方〉 <u>〈言葉〉</u> 〈介入〉 〈生活する人〉 <u>〈入る場所〉</u> 〈一度に口に入れる量〉〈一度に話す言葉〉 <u>〈項目〉</u>	<u>〈味〉</u> 〈印象〉 <u>〈食べ物好み〉</u>	〈方法〉
口 句全体比喩的表現	〔ことばの出口〕〈話す〉〈食べる〉〈生活〉	[感情]	

<p>mouth</p> <p>構成語比喩的表現</p>	<p>〔話す口〕〈言う〉<u>〈口を動かす〉</u>〈よく話す口〉<u>〈よく話す人〉</u>〈話し方〉〈言葉〉<u>〈発言者〉</u>〈食べる〉<u>〈くわえる〉</u>〈生活する人〉〈一度に口に入れる量〉〈一度に話す言葉〉</p>		
<p>mouth</p> <p>句全体比喩的表現</p>	<p>〔ことばの出口〕〔<u>ことばを入れる空間</u>〕〈生活〉</p>	<p><u>〈味の良い／(悪い)〉</u> [感情]</p>	
<p>目</p> <p>構成語比喩的表現</p>	<p>〈見ること〉〈視線〉〈監視〉〈注意〉〈見分ける力〉〈見方〉<u>〈ねらい①〉</u>〈ねらい②〉</p>	<p>〈視線〉〈見える範囲〉〈関心・思考の範囲〉〈視力〉<u>〈外見〉</u>〈体験〉〈目の様子〉</p>	<p>〈主要な部分〉</p>
<p>目</p> <p>句全体比喩的表現</p>	<p>〈見る〉〈知る／知らない〉〈空間的距離〉<u>〈時間的距離〉</u></p>	<p><u>〈泣く〉</u> [感情]</p>	

eye 構成語比喩的表現	〈見ること〉〈視線〉 〈監視〉〈注意〉〈見分ける力〉〈見方〉〈ねらい〉	〈視線〉〈見える範囲〉〈関心・思考の範囲〉〈視力〉 〈目の様子〉	
eye 句全体比喩的表現	〈よく見る〉〈知る／知らない〉〈空間的距離〉	〈驚き〉〈知る／知らない〉	
鼻 構成語比喩的表現	〈感じ取る力〉	〈嗅覚〉	〈目立つ部分〉 〈人〉
鼻 句全体比喩的表現		〈得意気〉 <u>〈においがする〉</u> 〈 <u>軽蔑</u> 〉	
nose 構成語比喩的表現	<u>〈かぎつける〉</u> 〈感じ取る力〉 <u>〈進む〉</u> 〈 <u>干渉</u> 〉	〈嗅覚〉 <u>〈におい〉</u>	〈顔〉 〈人〉
nose 句全体比喩的表現	<u>〈干渉〉</u>	〈高慢〉	

「口」と「mouth」を比較すると、能動的表現の方が日英で共通しない意味の数は多く、特に、構成語比喩的表現の方が共通しない意味が多い。構成語比喩的表現は身体部位詞単独で意味が拡張している表現であ

るため、「口」、「mouth」自体の意味の拡張の日英差が大きいということである。

「目」と「eye」を比較すると、受動的表現の方が日英で共通しない意味の数は多い。構成語比喩的表現は日英の共通度が高く、「eye」にある意味は全て「目」にも存在する。

「鼻」と「nose」を比較すると、能動的表現の方が日英で共通しない意味の数は多く、特に、構成語比喩的表現の方が共通しない意味が多い。これは、「鼻」、「nose」自体の意味の拡張の日英差が大きいということである。

以上より、日英での構成語比喩的表現の共通しない意味の数、つまり意味拡張の差の度合いは、口・mouth > 鼻・nose > 目・eye の順に大きいことが分かった。また、目・eye 以外は能動的表現ほど日英で共通しない意味の数が多。つまり、能動的表現でより身体部位詞の意味拡張範囲に日英差が出ると言える。反対に、受動的表現では日英差が小さいということになるが、これは人間の知覚・感覚様式は言語に関係なく類似しているからであると思われる。

次に、各意味の拡張プロセスを比較する。

表 3 拡張プロセスごとと意味数

	構成語比喩的表現					句全体比喩的表現		
	メト	メタ	メト +	メト +	メト +	メト	メタ	メト +
			メタ	シネ	メト			メタ
口	7	1	3	1	0	5	1	0
mouth	8	0	1	0	3	5	1	0
目	8	1	3	2	0	4	1	1
eye	6	0	3	2	0	3	1	0
鼻	2	0	1	0	0	3	0	1
nose	5	1	2	0	0	1	0	1

メトニミーによる拡張で生じた意味、メトニミーとメタファー両方による拡張で生じた意味など拡張プロセスごとに構成語比喩的表現と句全体比喩的表現の意味の数を整理すると、日本語と英語の拡張プロセスの差の度合いは、口・mouth > 鼻・nose > 目・eye の順であった。この順は、上でみた意味拡張の差の度合いと同様である。

次に、なぜこの順に差が生じるのかを考察する。

上で、能動的表現でより身体部位詞の意味拡張範囲に日英差が出ると述べた。そこで、身体部位の口、目、鼻を思い浮かべてみると、鼻より

も目の方が意図的に（能動的に）動かせるように思える。例えば、目は意図的に開閉できるし、視線は意図的に向けることができるが、鼻は意図的に開閉できないし、嗅ぐにおいを選択することはできない。しかし、意味拡張の範囲とプロセスに差が出る順は、口・mouth > 鼻・nose > 目・eye である。目は意図的に動かせるはずなのに、なぜ日英で意味拡張の共通度が高いのだろうか。個々の派生した意味に注目すると、目・eye は他の部位に比べて、視覚つまり知覚に関する表現が多い。先に述べたように、人間の知覚は言語によらず類似しているので、知覚に関する派生義が多い目・eye は意味拡張の共通度が高くなる。鼻は嗅覚器官としては意図的に動かすことができないにもかかわらず、日英差が最小ではない理由は、鼻・nose の表現には鼻の動きに関する表現が多いためである。特に「nose」では、鼻を「先端」としてとらえている表現が多いため、三部位の中で唯一、英語の方が派生義数が多いという特徴を生んでいる。口・mouth が意味拡張の差が大きい理由は、口は三部位の中で最も意図的に動かすことができ、かつ「話す」という行為は知覚ではないからである。

これらの考察より、日本語と英語の身体部位詞の意味拡張について次のような特徴が見出される。身体部位詞から派生した意味が受動的であるほど、また、知覚に関する表現が多いほど、日本語と英語の意味拡張ネットワークの範囲と拡張過程の差は小さく、身体部位詞から派生した

意味が能動的であるほど、また、知覚ではない動作に関する表現が多いほど、日本語と英語の意味拡張ネットワークの範囲と拡張過程の差は大きい。

なお、物体部分詞は形状・位置類似に基づく拡張のため、この特徴は当てはまらない。

第4章 物体部分詞への拡張のまとめ

本章では、身体部位詞から物体部分詞へのメタファーによる拡張について考察する。Heine は概念領域の拡張の方向として、以下のような順序関係を提唱している。

PERSON (人) > OBJECT (物体) > ACTIVITY (行為) > SPACE (空間) > TIME (時間) > QUALITY (質)

これは、あるカテゴリーがそれよりも右におかれたカテゴリーの起点領域となることはあってもその目標領域になることはないことを示している (松本 2003 : 124)。本論文で対象とした物体部分詞をこれら六つのカテゴリーに分類するとその有無は以下のようなになる。なお、行為 (ACTIVITY) に関するものは、人間の動作・状態に関する表現として分類しているため、以下の物体部分詞の表では扱わない。

表4 各カテゴリーに属する意味の有無

PERSON	OBJECT	SPACE	TIME	QUALITY
口	○	○	○	×
mouth	○	○	×	×
目	○	○	○	○
eye	○	×	×	×

鼻	○	○	○	×
nose	○	×	×	×

まず「口」は **OBJECT**、**SPACE**、**TIME** のカテゴリーに拡張している。

OBJECT には、「通用口」、「袖口」などの位置・形状・機能全ての類似性に基づく表現が分類される。**SPACE** には、〈はじめ（空間）〉の意味をもつ表現と、物体の特定の部分ではなく空間全体を指す「河口」などの位置・機能の類似性に基づく表現が分類される。**TIME** には、〈はじめ（時間）〉の意味をもつ表現が分類される。「mouth」は **OBJECT** と **SPACE** のカテゴリーに拡張している。**OBJECT** には、「the mouth of the tunnel」などの位置・形状・機能全ての類似性に基づく表現が分類される。**SPACE** には、物体の特定の部分ではなく空間全体を指す「the mouth of river」などの位置・機能の類似性に基づく表現が分類される。

「目」は全てのカテゴリーに拡張している。**OBJECT** には、形状類似性に基づく〈小さく丸い〉、〈すきま〉と〈物理的区切り〉が分類される。**SPACE** には〈空間的区切り〉、**TIME** には〈時間的区切り〉、**QUALITY** は、松本（2003）では「質」と訳されているが、「性質・属性」ととらえ、〈抽象的区切り〉と〈傾向・状態〉を分類する。「eye」は、**OBJECT** のカテゴリーにのみ拡張している。

「鼻」は **OBJECT**、**SPACE**、**TIME** のカテゴリーに拡張している。

OBJECT には、「岩鼻」などの位置・形状の類似性に基づく表現が分類される。SPACE には、「鼻先」のみが当てはまる。TIME には、「出鼻を折る／挫く／叩く」が分類される。「nose」は、OBJECT のカテゴリーにのみ拡張している。

日本語の目は QUALITY まで、口・鼻は TIME の領域まで拡張しているのに対して、英語では最も拡張する mouth でも SPACE の領域までしか拡張していない。このことから、英語よりも日本語の身体部位詞の方が比喩的拡張が生じやすいということがわかる。また、概念領域の拡張の順序関係は、今回対象とした表現についても確認され、抽象的な概念ほど拡張されにくいということが分かった。ここで扱った物体部分詞には全て位置類似性か形状類似性が関わっている。前述のように三部位の指示範囲は日本語と英語で同じであること、また、日本語では比喩的拡張表現からさらに拡張してできた表現が多いことから、日英の物体部分詞への拡張の差が生じる要因は、身体部位詞の認知の違いよりも言語構造的に多義に展開しやすいかどうかにあると考えられる。

終章

本稿では、日本語と英語の口・目・鼻を含む比喩的拡張表現を分類・分析することで、拡張の過程を述べながら口・目・鼻という身体部位詞の意味の適用範囲を示した。同じ身体部位詞であっても日本語と英語で意味の範囲は異なる部分があり、その原因は、人間の動作・状態に関する表現への拡張については、意味が受動的であるか能動的であるか、また知覚に関する表現であるか、物体部分詞への拡張については、言語構造的に多義に派生しやすいかにあるということが明らかになった。

人間の動作・状態に関する表現への拡張と物体部分詞への拡張は、拡張の過程や身体部位の位置・形状・機能のどこに焦点を当てるかが異なるため、意味の範囲の違いが生じる要因について異なる結論を出した。しかし、動作・状態に関する表現に身体部位の位置が関わっていたり、物体部分詞に身体部位の機能が関わっていたりと両者は完全には切り離せないものである。同じ身体部位詞から派生した表現としての特徴を見出すことを今後の課題としたい。

比喩的拡張表現分類

*動詞違い、形容詞違い、前置詞違いはカウントする

口 計 145

構成語比喩的表現 86 59%

〔他手段と対比して、話す口〕 9

口争い／口論／口喧嘩、口コミ、口約束、口語、口実、口頭、口伝え

〈話術〉 6 道具でプロセス

口がうまい、口が立つ、口が達者、口上手／下手、利口

〈話し方・言葉遣い〉 8 道具でプロセス

語り口、口が荒い、口が汚い、口が悪い、口振り、口調、(～な) 口を利く、早口

〈発言・言葉〉 25 道具で結果

口を叩く、陰口、軽口、口裏を合わせる、口うるさい、口惜しい、口が多い、口数、口が掛かる、口が過ぎる、口が減らない、口先、口癖、口答え、口にする、口喧しい、口を揃える、口を慎む、口を濁す、冗談口、告げ口、一口、減らず口、無口、悪口

〈介入〉 9 シネクドキー

口入れ、口利き、口添え、口を利く、口を添える、口を挟む／入れる／出す、口銭

〈味・風味〉 7 入れ物で中身、もので特性

後口、甘／辛口、薄／濃口、飲み口、口当たり

〈印象〉 3 メタファー

甘／辛口、口当たり

〈食べ物の好み〉 2 道具で結果

口が奢る、口に合う

〈生活する人〉 3 道具でプロセス、プロセスで行為者

口減らし、口を養う、人口

〈入る場所〉 6 メタファー

売れ口、大／小口、就職口、勤め口、働き口

〈一度に口に入れる量〉 2 入れ物で中身

小口、一口

〈一度に話す言葉〉 1 メタファー

一口

〈項目・単位〉 2 メタファー

口座、一口

〈方法〉 3 ?

手口、別口、遣り口

句全体比喩的表現 31 21%

〔ことばの出口〕 20 部分で全体(時間) メタファー

重い口を開く、口が重い、口が堅い、口が軽い、口が裂けても、口が滑る、口固め、口から出任せ、口ごもる、口にする、口を開く／開ける、口をついて出る、口をつぐむ、口を閉ざす、口を塞ぐ／封じる、口を割る、口外、閉口

《全体メトニミー》

〈話す〉 2 部分で全体 (時間)
口を利く、口が回らない

〈食べる〉 2 部分で全体 (時間)
口をつける、口にする

〈生活〉 2 プロセスで対象物、部分で全体 (時間)
口が干上がる、口を糊する

[感情] 3 開いた口が塞がらない (プロセスで原因)、口を尖らせる (部分で全体 (時間))、閉口 (結果で原因)

その他メトニミー：口が卑しい (原因でプロセス)

その他メタファー：口を拭う (部分で全体 → メタファー)

物体部分詞 28 19%

[位置]

〈はじめ (空間)〉 4 上り口、口絵、切り口、糸口

〈はじめ (時間)〉 4 秋口、口火を切る、序の口、宵の口

[位置] 〈空洞部に続く〉 [形状] 〈空隙〉 [機能] 〈出入り〉 17

上がり口、入口、裏口、火口、勝手口、傷口、玄関口、銃口、袖口、通用口、戸口、飲み口、捌け口、間口、窓口、袋の口、財布の口

[位置] 〈空洞部に続く〉 [機能] 〈出入り〉 3 改札口、河口、登山口

mouth 計64

構成語比喩的表現 30 47%

[他手段と対比して、話す口] 2

by word of mouth, from mouth to mouth

〈言う〉 3 道具でプロセス

mouth off (v), mouth (v) ①②→口を動かす③1 全体で部分 (時間)

〈よく話す口〉 2 もので特性 → 特性でもの

a big mouth, mouthy →よく話す人1 a big mouth

〈話し方・言葉遣い〉 3 道具でプロセス

have a foul mouth, mouthed, watch one's mouth

〈発言・言葉〉 8 道具で結果

be all mouth (and trousers), be in a person's mouth, give mouth to, in the mouth of, put one's money where one's mouth is, shoot [blow] off one's mouth, with one mouth

〈発言者〉 4 道具でプロセス、プロセスで行為者

by the mouth of a person, mouthpiece②, out of [from] a person's own mouth

〈食べる〉 1 道具でプロセス → 全体で部分 (時間) 1

mouth (v) ④ →mouth (v) ⑤

〈生活する人〉 2 道具でプロセス、プロセスで行為者

a mouth to feed, a useless mouth
〈一度に口に入れる量〉 1 入れ物で中身
mouthful①
〈一度に話す言葉〉 1 メタファー
mouthful②

句全体比喩的表現 25 39%

[ことばの出口] 9 部分で全体
keep *one's* big mouth shut, keep *one's* mouth shut, open *one's* mouth, run off at the mouth, shut [close] *one's* mouth, shut [close] *someone's* mouth, stop *a person's* mouth
〔（これから言う）言葉を入れる空間〕 3 部分で全体（時間） 入れ物で中身
put the words into *a person's* mouth, take the words out of *someone's* mouth, mouth-filling①

《全体メトニミー》

〈生活〉 1 部分で全体
live from hand to mouth
〈味の良い／（悪い）〉 4 結果で原因 → メタファー 2
make *someone's* mouth water①, melt in *someone's* mouth, mouth-filling②, mouth-watering → leave a bad [nasty] taste in the mouth, make *someone's* mouth water②

[感情] 5 結果で原因
down in the mouth, foam at the mouth, with open [full] mouth, make a (wry, ugly, hard) mouth [mouths]

その他：mouth-breather

物体部位詞 9 14%

[位置] 〈空洞部に続く〉 [形状] 〈空隙〉 [機能] 〈出入り〉 6
the mouth of the cave, the mouth of the tunnel, the mouth of the harbor, the mouth of the bottle, mouth of a gun, mouth of a bag
[位置] 〈空洞部に続く〉 [機能] 〈出入り〉 2
the mouth of river, the mouth of the alley (小道)
メトニミー 隣接関係 1 mouthpiece①

目 計 228

構成語比喩的表現 124 54%

〈見ること〉 10 道具でプロセス
一目散、一目瞭然、一目^{ひとめ}、一目惚れ、目^{めざと}敏い、目印、目の敵、目分量、目算、目測

〈視線〉 道具で結果 32
上目遣い、衆目、注目、人目に晒す、人目に立つ／付く／を引く、伏し目、目

移り、目が合う、目立つ、目が据わる／を据える、目が散る、目が止まる／を止める、目配せ、目線、目で追う、目の遣り場に困る、目を移す、目を奪う、目を落とす、目を注ぐ、目を転じる、目を走らせる、目を離す、目を引く、目を伏せる、目を向ける、目を遣る、目を通す

〈監視〉 5 シネクドキー

お目付け役、目が（行き）届く、目が離せない、目が光る、目を盗む

〈注意・関心〉 1 6 メタファー

着眼点、着目、注目、眼差し、目が向く、目が離せない、目に付く／止まる、目配り、目を配る、目の付け所、目もくれない、目を移す、目を注ぐ、目を転じる、目を向ける

〈見える範囲〉 4 道具でプロセス、プロセスで対象

一目、目に飛び込む、目に入る、目に触れる

〈関心・思考の範囲〉 2 メタファー

眼中にない、目に入る

〈視力〉 4 もので特性

目がいい／悪い、目が潰れる、目が弱い

〈見分ける力〉 1 2 シネクドキー

眼力、心眼、審美眼、見る目がある／ない、目が利く／高い、目が肥える／を肥やす、目がない、目利き、目を欺く

〈見方・立場〉 5 道具でプロセス

素人目、鼻屑目、大目に見る、〇〇目線（子ども目線など）、《形容詞・形容動詞》+目（厳しい目、冷静な目など）

〈ねらい①〉 3 道具でプロセス

目掛ける、目指す、目標

〈ねらい②〉 7 メタファー

目当て、目指す、目途、目（星）を付ける、目安、目的、目標

〈見た感じ、外見〉 3 道具でプロセス、プロセスで対象

外目、傍目、見た目

〈体験〉 5 メタファー

いい目、痛い目、憂き目、辛い目、ひどい目 （～に遭う、～を見る）

〈目の様子・表情〉 1 1 もので特性

色目を使う、流し目、眼差し、目顔、目が物を言う、目が笑う、目つき、目の色変える、目は口ほどに物を言う、目礼、《形容詞・形容動詞》+目（冷たい目、優しい目、虚ろな目など）

〈顔の主要な部分〉 3 → 2 メタファー

見目（眉目）麗しい、目鼻立ち、面目 → 眼目、目鼻がつく

句全体比喩的表現 50 22%

《全体メトニミー》 33

〈見る〉 2 原因でプロセス
目にする、目の当たりにする

〈空間的距離〉 3 空間隣接
目先、目前、目下

〈泣く〉 5 部分で全体（時間）
目が潤む／を潤ませる、目頭が熱くなる／を押さえる／を拭う

[感情] 14

怒り：大目玉を食う、目が吊り上がる、目くじらを立てる、目を剥く

興奮：目が血走る／を血走らせる、目が吊り上がる

驚き：目玉が飛び出る、目を見張る、目を剥く

悲惨：目も当てられない、目を覆う

喜び：目が輝く、目を輝かす

その他9：刮目に値する、白い目で見ると、目が冴える、目が点になる、目覚ましい、目障り、目の黒いうち、目を掛ける、目を細める

《全体メタファー》 17

〈知る／知らない〉 2 目をつぶる、目を開く

〈時間的距離〉 4 目先、目前、目下、長い目

その他11：目が眩む、目が覚める、目が回る、目覚める、目に浮かぶ、目に染みる、目に焼きつく、目の上のたん瘤、目の毒、目の保養、目の前が真っ暗になる

物体部分詞 54 24%

[形状] 〈小さく丸い〉 5 さいころの目、綴じ目、縫い目、針目、目盛り
目盛りから 〈めもり・量〉 4 八分目、目一杯、目方、目減り

〈すきま〉 17 網の目、編み目、粗目、織り目、刻み目、切り目、切れ目、裂け目、継ぎ目、抜け目、布目、目が粗い、目地、目詰まり、目張り、破れ目、割れ目

〈物理的区切り〉 5 メタファー 折り目、焦げ目、切れ目、結び目、分け目

〈空間的区切り〉 2 メタファー 境目、分かれ目

〈時間的区切り〉 4 メタファー 折り目、変わり目、切れ目、境目

〈抽象的区切り〉 3 メタファー 境目、分かれ目、分け目

〈順番・経験〉 1 時間的区切りの図地反転

数詞＋目（十年目、三度目、一番目など）

〈一つ一つ〉 9 抽象的区切りの図地反転

科目、曲目、五目飯、細目、種目、名目、目次、目録、数詞＋目（一つ目、三番目など）

〈傾向・状態〉 4 上がり目／下がり目、落ち目、効き目

eye 計 147

構成語比喩的表現 82 56%

〈見ること〉 4 道具でプロセス

for *someone's* eye only, by the eye, to the eye, eye (v) ①

〈視線〉 29 道具で結果

all eyes are on, all eyes are turned [focused] on, cast *one's* eyes about [down], cast [run] an eye [*one's* eye(s)] over, catch *someone's* eye①②, cut (the) eyes [an eye/*one's* eye], drop *one's* eyes, *one's* eyes fall [rest] upon, give *someone* [*something*] the eye①, fix [fasten] *one's* eyes on, in the public eye, keep an [*one's*] eyes on②, keep *one's* eyes glued to, keep *one's* eye on the ball①, keep *one's* eyes off, lay [set/clap] eyes on, take *one's* eyes off, turn *one's* eyes, meet *someone's* eye(s)①, with all *one's* eyes, eye-catcher

〈監視〉 10 シネクドキ

be all eyes, an eagle eye, have an [*one's*] eyes on②, keep an [*one's*] eye on①, have [keep] one eye [half an eye] on, keep *one's* eye on the ball②, private eye, under *a person's* eye(s), with one eye on *private eye は人 (部分で全体)

〈注意・関心〉 9 メタファー

all eyes are on, all eyes are turned [focused] on, in the public eye, have a roving eye, have an eye to②, have eyes only for, open (up) *one's* eyes, with an eye to

〈見える範囲〉 3 道具でプロセス、プロセスで対象

meet *someone's* eye(s)②, out of the corner of *one's* eye, eyeshot

〈関心・思考の範囲〉 2 メタファー

There is more (to something [someone]) than meet the eye, have...in *one's* eye

〈視力〉 5 もので特性

hard on the [*one's*] eye, naked eye, have strong [good] eyes, have week eyes

〈見分ける力〉 4 シネクドキー

get *one's* eye in, have an eye for, keep *one's* eye in, with an eye for

〈見方・立場〉 4 道具でプロセス

in the eyes of, through the eye of, with a jaundiced eye, with the eye of

〈ねらい〉 6 道具でプロセス+メタファー

have an [*one's*] eye on①, have an eye to①, have [with] an [*one's*] eye to [for/on] the main chance, with an eye to①, eye (v) ②

〈目の様子・表情〉 6 もので特性

the evil eye, give *someone* [*something*] the eye②, the glad eye, make eyes at, with a beady eye, 《形容詞》+eye (friendly eye, angry eye など)

句全体比喩的表現 60 41%

《全体メトニミー》 29

〈よく見る〉 7 部分で全体

have an eye out [open], have [keep] *one's* eye peeled [skinned], keep an eye [*one's* eye(s)] out [open], keep an eye out for

〈空間的距離〉 2 空間隣接

(right) [in front of] before *one's* (very) eyes

〈驚き〉 9 プロセスで原因

with eyes like saucers, eye-opener, *One's* eyes nearly[almost/practically] pop out of *one's* head. *One's* eyes pop out. *One's* eyes start [stand] out of *one's* head. eyes out on stalks

その他 1 1 : a gleam [glint/twinkle] in the eye, black(en) *someone's* eye, get [have] a black eye①, give someone a black eye, not [never] bat an eye, see eye to eye, sleep with one eye open, without batting eye

《全体メタファー》 31

〈知る／知らない〉 7

eye-opener, open (up) *someone's* eyes, shut [close] *one's* eye to, with *one's* eyes closed [shut]②, with *one's* eyes (wide) open

その他 2 4 : be up to *one's* [the] eye in①②, easy on the eye(s), feast *one's* eyes on, get [have] a black eye②, give someone black eye②, hard on the [*one's*] eye, have eyes in [at] the back of *one's* head [neck], hit someone (right) between the eyes①②, in the twinkling [twinkle/blink] of an eye, please the eye, take *one's* eye off the ball, scratch *someone's* eyes out, spit in *someone's* eye, turn a blind eyes, with half an eye, weather eye, with *one's* eyes closed [shut]①

物体部分詞 5 3%

[形状] 〈穴〉 5

eyes of the dress (留め穴), the eyes of the camera (レンズ), eyes of the potatoes (芽), the eye of a typhoon (台風の目), the eye of the needle (針の穴)

鼻 計50

構成語比喩的表現 6 12%

〈嗅覚〉 1 もので特性

鼻が利く

〈感じ取る力〉 1 メタファー

鼻が利く

[顔の突出した部分]

〈顔の目立つ部分〉 2

鼻筋が通る、目鼻立ち

〈人〉 2 部分で全体 (空間)

鼻を突き合わせる、鼻を寄せ合わせる

句全体比喩的表現 36 72%

《全体メトニミー》 29

〈においがする〉 4 結果で原因、原因で結果、部分で全体
鼻が曲がる、鼻に付く、鼻を打つ／突く

〈得意気・自信〉 4 プロセスで原因

鼻が高い、鼻高高、鼻を高くする、小鼻をうごめかす

→メタファー 4 鼻っばしが強い、鼻っ柱をへし折る、鼻に掛ける、鼻を折る

〈軽蔑〉 4 プロセスで原因

鼻(先)であしらう、鼻で笑う／鼻先でせせら笑う／鼻の先で笑う

その他 13 : 小鼻／鼻の穴を膨らます、酸鼻を極める、鼻息が荒い、鼻息を窺う、鼻歌混じり、鼻白む、鼻声を出す、鼻の下を伸ばす／を長くする、鼻も動かさず、鼻をしかめる、鼻を鳴らす

《全体メタファー》 7

木で鼻を括る、鼻薬を嗅がせる／利かせる、鼻つまみ者、鼻面を取って引き回す、鼻曲がり、鼻持ちならない

物体部分詞 8 16%

[位置] 〈先端〉 1 鼻緒

〈はじめ(時間)〉 3 出鼻を折る／挫く／叩く

[位置] 〈先端〉 [形状] 〈突き出した形〉 4

岩鼻、木鼻、出鼻、鼻先(地形、乗り物)

nose 計 50

構成語比喩的表現 20 40%

〈かぎつける、探し出す〉 1 メタファー

nose out

〈干渉、詮索〉 4 メタファー

nose about [around / into], nosy

〈嗅覚〉 2 もので特性

have a good / poor nose

〈感じ取る力〉 3 メタファー

follow *one's* nose②, have a (good) nose for, a political nose

〈におい、香り〉 道具で対象 3

the nose of hay, the nose of tea, the nose of a wine

[顔の突出した部分] 1

(right) under *someone's* (very) nose①

〈顔〉 3 部分で全体 (空間)
 before *one's* nose, nose to nose, show *one's* nose
 〈人〉 1 部分で全体 (空間)
 count noses
 〈進む、進める〉 2 道具でプロセス
 nose into, nose *one's* way

句全体比喩的表現 28 56%

《全体メトニミー》 6
 〈高慢〉 3 プロセスで原因
 hold [stick] *one's* nose in the air / with *one's* nose in the air
 [顔の突出した部分] 2
 follow *one's* nose①, (always) have *one's* nose in a book

その他 1 : thumb *one's* nose (at)

《全体メタファー》 22
 [顔の突出した部分] 4
 have [keep] *one's* [*someone's*] nose to the grindstone, see beyond (the end of) *one's* nose / see farther than the end of *one's* nose
 〈干渉〉 6
 keep *one's* nose clean, keep *one's* nose out of, poke [push / shove / stick] *one's* nose in [into]

その他 1 2 : bite [snap] *someone's* nose off, a bloody nose, bloody *someone's* nose, cut off *one's* nose to spite *one's* face, get [have / receive] a bloody nose, hold *one's* nose②, look down *one's* nose (at), put *someone's* nose out of joint, (right) under *someone's* (very) nose②

物体部分詞 2 4%

[位置] 〈先端〉 [形状] 〈突き出した形〉 2
 the nose of 乗り物 (car, airplane, ship など) , the nose of the saddle

数 (%)	構成語	句全体	物体部分詞	計
口	86 (59)	31 (21)	28 (19)	145
mouth	30 (47)	25 (39)	9 (14)	64
目	124 (54)	50 (22)	54 (24)	228
eye	82 (56)	60 (41)	5 (3)	147
鼻	6 (12)	36 (72)	8 (16)	50
nose	20 (40)	28 (56)	2 (4)	50

英語慣用表現意味表

[mouth]

- be all mouth (and trousers) 口先ばかりで実行が伴わない
- be in *a person's* mouth 人の噂になって、人に言われて
- a big mouth べらべらしゃべる (人)
- by the mouth of *a person* 人に代弁させて、人を通じて
- by word of mouth 口上で、口頭で
- down in the mouth しょげて、がっかりして、意気消沈して、元気なく
- foam at the mouth ひどく立腹する、かんかんに怒る、激怒する
- from mouth to mouth 口から口へ、口伝えで、口コミで、人から人へ
- give mouth to... …を口に出す
- have a foul mouth 口が悪い、口汚い
- in the mouth of... …の話によると、…に言わせると
- keep *one's* big mouth shut 黙っている、秘密 [情報] をもらさない
- keep *one's* mouth shut 黙っている
- leave a bad [nasty] taste in the mouth 〈物事が〉 (人に) 後味の悪い思いをさせる
- live from hand to mouth その日暮らしをする
- make a (wry, ugly, hard) mouth [mouths] (不賛成・嘲笑などを示すために)
口をゆがめる、顔をしかめる
- make *someone's* mouth water ① (食べ物が) (人) によだれをたらさせる、うまそうだ ②~の気をそそる、欲しくてたまらなくさせる
- melt in *someone's* [the] mouth (食べ物が) とろけるようだ、とくにおいしい、格別に味がよい
- mouth (v) ①大げさに言う、気取って [演説調で] 言う ②ぶつぶつ言う、繰り返し言う ③声を出さずに口だけを動かして言う ④口に入れる、食べる ⑤くわえる
- mouth off ① (生意気な) 口答えをする ② 〈意見・反論などを〉 (人前で) 堂々と [尊大に、遠慮なく] 述べる ; ((侮辱的)) (物知り顔に) 強く言う、口出しをする
- a mouth to feed 養われるべき人、扶養家族
- mouth-breather ばか、まぬけ
- mouthed 言葉遣いが…の
- mouth-filling ① 〈文句などが〉 長ったらしい、大げさな ② 〈ワインが〉 (いくらでも飲みたくなるほど) 芳醇な味の
- mouthful ①一口分、ロ一杯 ② (言いにくいほど) 長い言葉
- mouthpiece ①口にくわえる部分、吹き口、マウスピース、送話口 ②代弁者
- mouthy おしゃべりな
- mouth-watering よだれの出そうな、おいしそうな
- open *one's* mouth 口を開く、ものを言う ; (秘密・情報を) 告げる、もらす、口を割る
- out of [from] *a person's* own mouth 直接本人の口から
- put *one's* money where *one's* mouth is 自分の言ったことを 実際の行動で示そうとする
- put words into *a person's* mouth ①言うべきことを人に授ける [言わせる] ②人が言いもしないことを言ったことにする

run off at the mouth (～のことを) べらべらしゃべる、思慮なく話す、しゃべりまくる
 shoot [blow] off *one's* mouth べらべらしゃべる、やたらに誇張して[大げさに]言う、誇らしげに話す
 shut [close] *one's* mouth 黙る、口をつぐむ、口を閉じる
 shut [close] *someone's* mouth ～の口をふさぐ、～を黙らせる、～に秘密を守らせる
 stop a *person's* mouth 人を黙らせる；人の口止めをする
 take the words (right) out of a *person's* mouth (人が) 言おうとしていることを先に言う
 a useless mouth 自活のできない厄介者、穀つぶし
 watch *one's* mouth ことば [口の利き方] に気をつける
 with one mouth 異口同音に、口をそろえて
 with open [full] mouth 心を奪われて、あっけにとられて

[eye]

all eyes are on …にみんな [万人] が注目している
 all eyes are turned [focused] on …を衆人環視である、全員が…を注視する
 be all eyes 一心に見入る、まじまじと見つめる、目を皿にして見る
 be up to *one's* [the] eye in ① (仕事などに) 没頭して ②全く、深くはまりこんで
 (right) [in front of] before *one's* (very) eyes (すぐ) 目の前で [に]
 black(en) *someone's* eye ～を殴って目にあざをつける、あざができるほど～を殴る
 by the [*one's*] eye 目分量で、目測で
 cast *one's* eyes about [down] 見回す [見下ろす]
 cast [run] an eye [*one's* eye(s)] over ～にざっと目を通す [走らせる]、～をひとわたり眺める
 catch *someone's* eye ①～と目 [視線] が合う ②～の目に止まる、注意を引く
 cut (the) eyes [an eye, *one's* eye] ちらりと見る、横眼で見る
 drop *one's* eyes 視線を落とす、うつむく
 an eagle eye 鵜の目鷹の目、鋭い眼力、細かいチェック
 easy on the eye(s) (見ると) 気持ちがよい、(目に) 快い
 the evil eye 悪意の目
 eye (v) ①じっと見る；(物珍しそうに [いぶかしそうに]) じろじろ見る ②…に気を配っている；もくろむ、狙う
one's eyes fall [rest] upon …が人の目にふれる
One's eyes nearly [almost/practically] pop out of *one's* head. (驚いて) 目玉が飛び出しそうになる
One's eye pop out. (驚いて) 目玉が飛び出す [目玉が飛び出しそうになる]
One's eyes start [stand] out of *one's* head. (驚いて) 目玉が飛び出しそうになる
 eye-catcher 人目を引く人 [もの]
 eye-opener (目を見張らせるような) 驚嘆的な事件 [行為、話]；実に啓蒙的なもの
 eyes out on stalks 目が飛び出るほど驚いて [ショックで]

eyeshot 目の届くところ、視界、視野
 feast *one's* eyes on ~で目を楽しませる、目の保養とする
 fix [fasten] *one's* eyes on …に注目する、じっと見つめる
 for *someone's* eyes only ~にしか見せない、~以外の目に触れさせない(ように)
 get [have] a black eye ①目にあざができる ②評判が悪い、評判が地に落ちている
 get *one's* eye in 《スポーツ》ボールに目が慣れる；訓練して目が慣れる、目が利くようになる、鑑識眼が身につく
 give *someone* a black eye ①~を殴って目にあざをつける ②~の評判を悪くする
 give *someone* [something] the eye ①~に視線を浴びせる、~をじろじろ[ちらちら]見る、~に注目する ②~を冷たい目で見ると、白い目で見ると
 the glad eye 親しげな目付き、色目
 a gleam [glint/twinkle] in *one's* eye まだ全く漠然とした考え
 hard on the [*one's*] eyes (光などが)目に悪い(比喩的に「醜い」という意味を表す用例も多いため、「醜い」も意味とする)
 have…in *one's* eye(s) …を眼中においている、もくろんでいる；に目をつけている
 have a roving eye 浮気っぽい
 have an eye for=with an eye for ~を見る目がある、判断力がある
 have an [*one's*] eye on ①~に目をつけている、~が欲しいと思う ②~に気をつける、~から目を離さない；~を見張る、監視する
 have an eye out [open] 見逃さないように注意する
 have an eye to ①…に目をつけている、…を目指す ②…に注目する、気をつける
 have an [*one's*] eyes to [for/on] the main chance = with an [*one's*] eyes to [for/on] the main chance 自分の利益を優先する、私利私欲に走る
 have eyes in [at] the back of *one's* head [neck] 背中に目がついている、絶えず四方に注意を払っている、抜け目がない
 have eyes only for ~から目を離せない、~に目[心]を奪われている
 have [keep] one eye [half an eye] on ~にも注意している、気をつけている、~を気にしている
 have [keep] *one's* eyes peeled [skinned] よく気をつけている、見逃さないように注意している、目を皿のようにして捜している、見張っている
 have strong [good] eyes 視力がいい
 have weak eyes 視力が悪い
 hit *someone* (right) between the eyes ①(考えなどが)ひらめく ②~に強烈な印象を与える、~を大いに驚かす、驚嘆させる
 in the eye of ~から見て、~の見地に立って、~に照らして
 in the public eye 世間の目に触れて
 in the twinkling [twinkle/blink] of an eye 瞬時に、またたく間に、あっという間に
 keep an [*one's*] eye on ①~を見守っている、~から目を離さない；~を見張っている、監視している ②~を注意深く見つめている、じっと見つめている
 keep an eye [*one's* eye(s)] out [open] 見逃さないように注意している

keep an eye out for …を警戒する、(望むことなど)を待ちかまえる
 keep *one's* eyes glued to 目をくぎづけにする、目を離さないで注意深く見る
 keep *one's* eye in 腕[勘]が鈍らないようにしている
 (just) keep *one's* eyes off ~を見ないようにする
 keep *one's* eye on the ball ①《球技》ボールの動きを目で追う、ボールから目を離さない ②油断しない、注意を怠らない、常に気をつけている
 lay [set/clap] eyes on *someone* [*something*] ~を見かける、初めて見る
 make eyes at *someone* ~に色目を使う、~と熱い視線を交わす
 meet *someone's* eye(s) ①~と目を(まっすぐに)合わせる ②~の目に入る、目に見える
 naked eye 肉眼、裸眼
 not [never] bat an eye まゆひとつ動かさない、まばたきひとつしない、全く動じない
 open (up) *one's* eyes 目を留める
 open (up) *someone's* eyes 目を向けさせる、気づかせる、分からせる
 out of the corner of *one's* eye 正視しないで、横眼で(盗み)見て、こっそりと(見て)
 please the eye 見て美しい、目の保養になる
 private eye 私立探偵
 scratch *someone's* eyes out ~を責め立てる、ただではおかない
 see eye to eye (with *someone*) (on *something*) 意見が一致する、意見の一致を見る
 shut [close] *one's* eye to *something* ~に対して目をつぶる、~を見て見ぬふりする
 sleep with one eye open 片目だけ眠る、眠りが浅い
 spit in *someone's* eye ~に対して侮辱的な振る舞いをする
 take *one's* eyes off …から目を離す
 take *one's* eye off the ball ボールから目を離す；注意を怠る、油断する
 There is more (to *something* [*someone*]) than meet the eye. 表面[見た目]だけではわからない(ところがある)
 through the eye of …の立場で、の目[見地]を通して
 to the eye 見たところでは
 turn a blind eyes (to) 見て見ぬ降りをする
 turn *one's* eyes (to) (…の方へ)目を向ける
 under a *person's* eye(s) 人に監視[注意]されて
 weather eye 《比喩的》絶えざる注意[警戒、見張り]
 with a beady eye 注意深く、疑いの目で
 with a jaundiced eye ひがんだ目で
 with all *one's* eyes よく注視して
 with an eye for …に鑑識眼がある、洞察力がある
 with an eye to ①…する目的で、しようとして ②…によく注意して
 with *one's* eyes closed [shut] ①きわめてたやすく ②事情を知らずに、やみくもに
 with eyes like saucers 目を皿のようにして
 with *one's* eyes (wide) open ~をよく分かった上で、十分承知の上で
 with half an eye 一目で；やすやすと

with one eye on …に（警戒の）目をつけながら
with the eye of …の目で
without batting an eye まゆひとつ動かさずに、顔色ひとつ変えずに

[nose]

bite [snap] *someone's* nose off ～を怒鳴りつける、食ってかかる
before *one's* nose 自分の真正面に [を]
a bloody nose （自尊心が傷つけられるような）大打撃、惨敗
bloody *someone's* nose （自尊心が傷つくほど）～を惨敗させる、めちゃくちゃにやっつける、さんざんやり込める
count noses 頭数 [人数] を数える
cut off *one's* nose to spite *one's* face （腹立ちまぎれに相手を困らせようとして）自分の損になることをする
follow *one's* nose ①真っ直ぐに進む ②思いついたままに行動する、直感に従う
get [have / receive] a bloody nose （競争に負けて）鼻をへし折られる
have a good [poor] nose （鼻がいい／悪い）
have a (good) nose for ～をかぎつけるのがうまい、～に鼻が利く
（always）have *one's* nose in a book （絶えず）熱心に本を読んでいる
have [keep] *one's* [*someone's*] nose to the grindstone （仕事や勉強などを）絶えず熱心にやる [やらせる]、休まずにことこつやる
hold *one's* nose 不快な [違法な、いやな] ことを無視しようと努める
hold [stick] *one's* nose in the air / with *one's* nose in the air つんとすます、高慢な態度をとる
keep *one's* nose clean ごたごたに巻き込まれないようにする
keep *one's* nose out of ～にちょっかいを出さないでおく、首を突っ込まないでおく
look down *one's* nose ～を軽蔑の目で見ると、見下す、ばかにする
nose about [around / into] 穿鑿する、干渉する
nose into 〈乗り物を〉ゆっくり進める
nose out かぎつける、探し出す
nose to nose 顔をつき合わせて
nose *one's* way 〈乗り物が〉ゆっくり前進する
nosy (nosey) 詮索好きな、おせっかいな、好奇心の強い
poke [push / shove / stick] *one's* nose in [into] （～に）首を突っ込む、余計な口出しをする、お節介をやく
a political nose 政治に対する直観、民衆の欲求を本能的に察知する才
put *someone's* nose out of joint ～の気分を害する、～をいら立たせる
see beyond (the end [length] of) *one's* nose / see farther than the end of *one's* nose 洞察力がある
show *one's* nose 顔を出す
thumb *one's* nose ①（反抗・侮蔑の身振りとして）親指を鼻につけて他の指を広げる ②（～を）軽蔑 [無視] する
（right）under *someone's* (very) nose ①人のすぐ目の前 [目前] で ②人が気づかぬうち

参考文献

- 有菌智美 2008 「『顔』の意味拡張に対する認知的考察」『言葉と文化』9: 287-301
- 有菌智美 2013 「行為のフレームに基づく『目』,『耳』,『鼻』の意味拡張: 知覚行為から高次認識行為へ」『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』25: 1: 123-141
- 方小贇 2011 「日本語と中国語における『首』を含んだ慣用句の比較」『宇都宮大学国際学部研究論集』31: 137-150
- 方小贇 2011 「日本語と中国語における『鼻』を含んだ慣用句の比較」『外国文学』60: 15-32.
- 方小贇 2014 「日本語慣用句の成り立ち— 理論的な枠組みと発生のメカニズム—」『外国文学』63: 77-85
- Heine, B. 1997 *Cognitive Foundations of Grammar*. New York:Oxford University Press.
- Heine, B. 宮下博幸監訳 2017 『ことばはなぜ今のような姿をしているのか 文法の認知的基盤』 関西学院大学出版会
- 石田プリシラ 2015 『言語学から見た 日本語と英語の慣用句』 開拓社
- Kövecses, Z., & Radden, G. 1998 "Metonymy: Developing a cognitive linguistic view." *Cognitive Linguistics*, 9: 1: 37-78

- 国広哲弥 1985 「慣用句論」『日本語学』4:1:4-14
- Lakoff, G., & Johnson, M. 1986 『レトリックと人生』 渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳 大修館書店
- 李明玉 2007 『日本語と韓国語の慣用表現の差異—比較言語文化学の立場から』 笠間書院
- 林科成 2007 「認知言語学から見た『手』の多義性—メトニミー表現を中心に—」『「対話と深化」の次世代女性リーダーの育成：「魅力ある大学院教育」イニシアティブ Vol.平成18年度活動報告書：シンポジウム編』97-104
- 松本曜 2000 「日本語における身体部位詞から物体部位詞への比喩的拡張—その性質と制約」『認知言語学の発展』坂原茂編 ひつじ書房 pp.317-346
- 松本曜 2003 『認知意味論』 大修館書店
- 皆島博 2006 「日英語の身体部位語彙：『アタマ』と"head"」『福井大学教育地域科学部紀要．第I部，人文科学．外国語・外国文学編』62:49-62
- 村木新次郎 1985 「慣用句・機能動詞結合・自由な語結合」『日本語学』4:1:15-27
- 中村明 1985 「慣用句と比喩表現」『日本語学』4:1:28-35
- 中右実編 卷下吉夫・瀬戸賢一著 1997 『文化と発想とレトリック』

研究社

根木英彦 2015 「英語と日本語における身体語彙の意味拡張：首から上の部位に関して」『語学教育研究論叢』32：59-78

Nunberg, G., Sag, I. A., & Wasow, T. 1994 “Idioms” *Language* 491-538

沖本正憲 2009 「身体部位詞の比喩的意味拡張と顔の認識」『苫小牧工業高等専門学校紀要（WEB版）』44：64-79

瀬戸賢一 2005 『よくわかる比喩—ことばの根っこをもっと知ろう』
研究社

田中聡子 2002a 「『口』の慣用表現」『言葉と文化』3：5-20

田中聡子 2002b 「視覚表現に見る視覚から高次確認への連続性-視覚の文化モデル」『言語文化論集』23：2：155-170

田中聡子 2005 「顔と《ЛИЦО》：〈顔〉概念の日露対照研究」『世界の日本語教育 日本語教育論集』15：103-116

谷口一美 2003 『認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー』
研究社

辻幸夫編 2013 『新編認知言語学キーワード事典』 研究社

呉琳 2014 「身体部位詞の多義性とその習得—視覚器官〈目〉に日中対照を通して」『言語文化教育研究』12：187-197

山梨正明 2000 『認知意味論原理』 くろしお出版

山梨正明 2012 『認知意味論研究』 研究社

〈辞書類〉

見坊豪紀ら編 2014 『三省堂国語辞典』第七版 三省堂

小松寿雄, 鈴木英夫編 2011 『新明解語源辞典』 三省堂

増井金典著 2012 『日本語源広辞典』増補版 ミネルヴァ書房

佐藤尚孝 2001 『英語イディオム由来辞典』 三省堂

東郷吉男編 2003 『からだことば辞典』 東京堂出版

山田忠雄ら編 2012 『新明解国語辞典』第七版 三省堂

米川明彦・大谷伊都子編 2005 『日本語慣用句辞典』 東京堂出版

『大辞泉』第二版 小学館 2012 (電子辞書版)

『ランダムハウス英和大辞典』(第2版) 小学館 1994 (電子辞書版)

“Oxford Advanced Learner's Dictionary, Eighth Edition” Oxford

University Press 2010 (電子辞書版)

“Oxford Idioms Dictionary for learners of English” Oxford University

Press 2001

〈使用コーパス〉

British National Corpus

Corpus of Contemporary American English

Word-Neighbors

NINJAL-LWP for BCCWJ (国立国語研究所・Lago 言語研究所開発)

「現代日本語書き言葉均衡コーパス」少納言

用例.jp (<http://yourei.jp/>)

要約

具体的な形をもち、どの言語・文化下であっても人間の器官として共通の働きをする身体部位に注目し、身体部位詞の「慣用表現を含む比喩的拡張表現」を対象に研究を行った。同じ身体部位詞であるのに、なぜ日本語と英語で意味の適用範囲が異なるのかを、身体部位詞が含まれる慣用表現の意味のタイプと拡張のプロセスを分類・考察することで明らかにすることが本論文の目的である。

第1章では、身体部位詞の意味拡張や慣用句、*idiom*の先行研究を概観し、分析方法と本論文での慣用表現とその他用語の定義を示す。身体部位詞から人間の動作・状態に関する表現への拡張は、器官としての身体部位詞を中心とした意味のネットワークを設定し、その拡張の範囲を考察する。身体部位詞から物体部分詞への拡張は、位置・形状・機能の類似に基づくメタファーで説明する。各拡張の過程は、メタファー・メトニミー・シネクドキーを用いて分析する。身体部位は、人間の一部分・具体的存在などの認知的に際立つ条件を満たしているため、これらの拡張の起点として選択される。

第2章では、「口」、「*mouth*」、「目」、「*eye*」、「鼻」、「*nose*」の比喩的拡張表現を派生義ごとに分類し、意味拡張のプロセスを考察する。

「口」は、発話器官としての機能や摂食器官としての機能から拡張した表現や感情を表す表現、位置・形状・機能の類似性から拡張した表現を

もつ。物体部分詞は時間の表現まで拡張する。「mouth」も同様であるが、物体部分詞は空間の表現までしか拡張しない。「目」は、視覚器官としての機能や顔の中で主要な部分であることから拡張した表現、目の様子に注目した表現、感情を表す表現、形状の類似性から拡張した表現をもつ。物体部分詞は、抽象的なものを表す表現まで拡張する。

「eye」は、視覚器官としての機能から拡張した表現、目の様子に注目した表現、感情を表す表現、形状の類似性から拡張した表現をもつ。物体部分詞は具体的な物体の部分を表す表現までしか拡張しない。「鼻」は、嗅覚器官としての機能や顔の突出した部分であることから拡張した表現、鼻の様子や動きに注目した表現、位置・形状の類似性から拡張した表現をもつ。物体部分詞は時間の表現まで拡張する。「nose」も同様であるが、物体部分詞は具体的な物体の部分を表す表現までしか拡張しない。

第3章では、身体部位詞の人間の動作・状態に関する表現への拡張について考察する。表現の意味を「能動」と「受動」という観点から分類すると、日英語の構成語比喩的表現の共通しない意味の数は、口・mouth > 鼻・nose > 目・eye の順に多いこと、能動的表現でより身体部位詞の意味拡張範囲に日英差が出ることが分かった。また、日英語の拡張プロセスに差が生じた意味の数も同様の順であった。知覚に関する派生義が多い目・eye は意味拡張の共通度が高くなり、鼻の動きに関する表現が

多い鼻・nose は共通度があまり高くない。口は三部位の中で最も意図的に動かすことができ、かつ「話す」という行為は知覚ではないため、口・mouth の意味拡張の差が最も大きい。考察より、身体部位詞から派生した意味が受動的であるほど、また、知覚に関する表現が多いほど、日本語と英語の意味拡張ネットワークの範囲と拡張過程の差は小さく、身体部位詞から派生した意味が能動的であるほど、また、知覚ではない動作に関する表現が多いほど、日本語と英語の意味拡張ネットワークの範囲と拡張過程の差は大きいということが明らかになった。

第4章では、身体部位詞から物体部分詞へのメタファーによる拡張について考察する。物体部分詞へ拡張した表現を Heine の概念領域の拡張の方向に当てはめると、日本語の目は QUALITY まで、口・鼻は TIME の領域まで拡張しているのに対して、英語では最も拡張する mouth でも SPACE の領域までにしか拡張していない。概念領域の拡張の順序関係は、今回対象とした表現についても確認されることが分かった。また、扱った物体部分詞には全て位置類似性か形状類似性が関わっており、三部位の指示範囲は日本語と英語で同じであること、また、日本語では比喩的拡張表現からさらに拡張してできた表現が多いことから、日英の物体部分詞への拡張の差が生じる要因は、身体部位詞の認知の違いよりも言語構造的に多義に展開しやすいかどうかにあると考えられる。

人間の動作・状態に関する表現への拡張と物体部分詞への拡張は、拡張の過程や身体部位の位置・形状・機能のどこに焦点を当てるかが異なる。しかし、両者は相互に関連性がある表現もあり、完全には切り離せないものであるため、同じ身体部位詞から派生した表現としての特徴を見出すことを今後の課題としたい。